

ISSN 1344-9710

宮城学院資料室年報

MIYAGI GAKUIN ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

信 望 愛

2020 年度

宮城学院資料室年報
— 信・望・愛 —
(二〇二〇年度)

第26号

宮城学院資料室



第26号
宮城学院資料室

宮城学院資料室年報

MIYAGI GAKUIN ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

信

望

愛

2020 年度



第 26 号

宮城学院資料室

もくじ

□巻頭言	宮城学院学院長 嶋田 順好	3
□資料紹介.....		5
	『HISTORY OF THE JAPAN MISSION OF THE REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES 1879-1904』 ヘンリー・K・ミラー 編集 翻訳 宮城学院女子大学名誉教授 飯塚 久榮	
□資料紹介.....		36
	明治期における宮城女学校のバイブル・ウーマンの活動 ～明治後期の年次報告から～ 宮城学院女子大学 一般教育部准教授 栗原 健	
□資料紹介.....		51
	「現在在校生徒中基督教信者名簿(明治三十九年十一月廿九日改訂)」 「明治三十九年九月一日以降洗禮受領者調」の紹介と若干の考察 資料室 佐藤 亜紀	
□小論.....		75
	「宮城学院の植物たち その2 ー野生ランー」 宮城学院女子大学 生活環境科学研究所 ミツバチ科学研究部門助教 藤原 愛弓 宮城学院女子大学 一般教育部教授 木村 春美	
□彙報.....		80
	2020 (令和2)年度彙報 宮城学院資料室	

[表紙]宮城学院礼拝堂のステンドグラス 「降誕」
ガブリエル・ロワール(1980)



巻頭言

宮城学院学院長 嶋田 順好

2020年度はコロナ禍に明け、コロナ禍に暮れる一年となりましたが、ここに『資料室年報第26号』を無事発行することができますことを神に感謝するとともに、執筆にご尽力いただいた方々に衷心より御礼を申し上げます。今年度は主にバイブル・ウーマンに関連する大変興味深い英文資料の翻訳を収載することができましたことを心から喜びに存じます。

名誉教授の飯塚久榮先生は、合衆国改革派教会が日本伝道25周年を記念して発刊した *HISTORY OF THE JAPAN MISSION OF THE REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES 1879-1904* に収められている“EDUCATIONAL WORK Miyagi Girl's School”と“WOMAN'S WORK”と題された婦人宣教師の報告を訳出してくださいました。

一読して当時の宮城女学校の教育的営みが、婦人宣教師たちの献身的な祈りと奉仕に基づきつつ、文字通り“Mission School (伝道学校)”として貫かれていたことが手に取るように理解できる内容となっています。そのことは「婦人の活動」の冒頭でワイドナー宣教師が「バイブル・ウーマンの活動」を取り上げていることからよく理解できます。女性への伝道は、女性が担うことがふさわしいとの信念が、伝道活動の当初から婦人宣教師の間で共有され、それだけにバイブル・ウーマンの養成にも力が注がれたということがよく理解できます。そのこととともに私が深く心を打たれたのは「救貧活動と病院奉仕活動」に関するモール夫人の報告です。当時の婦人宣教師、宣教師夫人たちが、伝道に励みつつも、貧しい人々の過酷な状況を見て見ぬ振りすることができず、超教派で市内の諸教会に声をかけ、慈善協会を発足させ、赤貧洗うがごとき人々の支援のために奔走した様子を知らされます。「神を畏れ、隣人を愛する」ことをスクール・モットーとする宮城学院は、この当時から多くの婦人宣教師、宣教師夫人たちの献身によって、その志が貫かれていたことを確認させられたことでした。

一般教育部准教授の栗原健先生は、一昨年夏、ランカスター神学校を東北学院史資料センターの方々と共に訪問され、彼の地の福音・改革派歴史協会に保存されていた1905(明治38)年春から1919(大正8)年春までのバイブル・ウーマンに関わる年次報告書を複写してこられました。今回はそのうちの1905年(明治38)年、1908(明治41)年、1909(明治42)年の報告書を翻訳、解説してくださいました。女性の女性による女性のための伝道と共に、日曜学校を含む様々な領域でバイブル・ウーマンの働きが大きな支えとなって

いたことが手に取るように理解できる内容となっています。

資料室員の佐藤亜紀氏は、資料室倉庫に保管されていた明治39年の「現在在校生中基督教信者名簿」と「洗礼受領者調」を見出し、翻刻してくださいました。印象的なことは学年が上がるにつれ受洗者が増え、最上級生になると全員が洗礼を受け、キリスト者とされたという事実です。あらためて当時の婦人宣教師の伝道にかける熱き思いを如実に示された思いです。

一般教育部教授の木村春美先生は、ミツバチ科学研究部門助教の藤原愛弓氏と共同して「宮城学院の植物たち その2 ー野性ランー」を寄稿してくださいました。緑濃き桜ヶ丘キャンパスの自然の広さ、長さ、高さ、深さを再認識させられる希少植物の野性ランの報告です。遊歩道散策の楽しみが、これまで以上に増し加えられたことを喜ばずにはられません。

この年報を通してあらためて婦人宣教師並びに宣教師夫人たちが、宮城女学校にかけた熱き祈りと献身の姿を示されたことでした。時の流れと共に、その表現や取り組みの仕方は変化しつつも、底流に一貫して流れる建学の精神を堅持する祈りと志においては一つとされ、諸先達の思いをしっかりと継承していく者でありたいと願わずにはられません。



□資料紹介

『HISTORY OF THE JAPAN MISSION OF THE REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES 1879-1904』ヘンリー・K・ミラー 編集

翻訳 宮城学院女子大学名誉教授 飯塚 久榮

この度、ここに紹介する資料は『HISTORY OF THE JAPAN MISSION OF THE REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES 1879-1904』の

- ・ EDUCATIONAL WORK Miyagi Girls' School
- ・ WOMAN'S WORK Bible Women's Work
Charity and Hospital Work
Evangelistic Work by Girls' School Teachers
Evangelistic Work by Wives of Missionaries,
Pastors and Evangelists

という部分です。本学名誉教授である飯塚久榮先生に翻訳していただきました。

刊行された1904（明治37）年は、合衆国改革派教会が日本伝道において25周年を迎えた記念すべき年でありました。ミッションのこれまでの働き、そしてこれからの必要性や展望について、仙台で活躍している宣教師たちにより書き記され、編集を行ったH.K.ミラー（第四代宮城女学校校長）は、日本伝道の25年間の自分たちの物語をここに書き記したと序文で述べています。今回資料室年報でご紹介いたしますのは、いずれも、宮城女学校とかかわりの深い婦人宣教師によって書かれた章であります。特に、バイブル・ウーマンとして実際に活動した宮城女学校の卒業生たちが顔写真と名前入りで紹介されているのは大変貴重であり、バイブル・ウーマンとして使命を感じ婦人宣教師と共に奉仕活動を行っていた卒業生の記録を、飯塚先生の翻訳によって多くの方にご紹介できますことを心より感謝申し上げます。

資料室 佐藤亜紀

略年表 (1881～1910)

- 1881(明治14)年 5月 1日 ・ 仙台教会(現仙台東一番丁教会)創立
- 1886(明治19)年 5月15日 ・ 仙台神学校(現東北学院【TG】)開校
 7月16日 【MG】E.R.プールボー、M.B.オールト着任
 9月18日 【MG】宮城女学校開校
 9月24日 【MG】授業開始
 10月11日 ・ 宮城英学校(東華学校)開校
- 1887(明治20)年 1月 ・ 東京電灯会社、初めて点灯
 4月 【MG】仙台区東三番丁162番地～169番地に校地購入
 ・ 第二高等中学校(旧制第二高等学校)創立
 12月15日 ・ 東北本線上野塩釜間開通
- 1888(明治21)年 ・ 国歌「君が代」制定
- 1889(明治22)年 2月11日 ・ 大日本帝国憲法発布
 7月 ・ 東海道本線開通
 7月 5日 【MG】校舎献堂式
 ・ 北里柴三郎、破傷風血清療法の発見
- 1890(明治23)年 【MG】日本人男性を幹事として採用、半年後宗教教育で越権行為
 ・ 教育勅語発布
- 1891(明治24)年 ・ 仙台神学校、「東北学院」と改称【TG】
 11月 【MG】M.C.ハロウエル着任
 【MG】生徒から教育内容についての要求
- 1892(明治25)年 1月21日 【MG】「いわゆるストライキ」事件により生徒5名退学処分
 ・ 東華学校廃止
 ・ 現尚綱学院創立
- 1893(明治26)年 6月26日 【MG】プールボー校長送別会
 6月29日 【MG】第一回卒業式(卒業生4名)
 7月 【MG】プールボー姉妹帰国
 7月22日 ・ 文部省訓令第八号「女子教育ニ関スル件」公布
 9月 【MG】J.P.モール、第二代校長就任
- 1894(明治27)年 6月29日 【MG】第二回卒業式(卒業生1名)
 8月 1日 ・ 日清戦争(～95.3)
 ・ コレラの流行、天然痘の流行、地震の頻発
 9月 2日 【MG】L.ズーフル、第三代校長就任

- 1895(明治28)年 6月29日
 - ・東北学院に「労働会」設立【TG】
 - 【MG】第三回卒業式(卒業生5名)
 - 【MG】生徒10名退学処分
 - ・仙台市に電灯がつく
 - ・コレラ流行
- 1896(明治29)年 5月
 - 【MG】漢文教員退職
- 6月15日
 - ・三陸海岸地震、大津波(35,000人死亡)^{注1}
- 6月21日
 - 【MG】第四回卒業式(卒業生3名)
- 9月18日
 - 【MG】宮城女学校創立満十年の日
 - 【MG】創立十周年式典
- 1897(明治30)年 6月29日
 - 【MG】第五回卒業式(卒業生2名)
- 8月
 - 【MG】L.M.ロールボー着任
- 9月
 - 【MG】バイブル・ハウスが校地内に建設
 - ・「河北新報」創刊
 - ・現宮城県宮城第一高等学校創立
- 1898(明治31)年 6月29日
 - 【MG】第六回卒業式(卒業生1名)
- 11月26日
 - 【MG】教科課程改正 本科を4年から5年に延長
- 1899(明治32)年 6月29日
 - 【MG】第七回卒業式(卒業生5名)
- 10月 9日
 - 【MG】ゾーフル校主就任
 - ・高等女学校令公布
 - ・私立学校令公布
 - ・文部省訓令第十二号公布
- 1900(明治33)年 3月
 - 【MG】ロールボー健康を害し帰国(後に退職)
 - 【MG】一年制聖書専攻科設置
- 6月11日
 - 【MG】S.L.ワイドナー着任
- 6月29日
 - 【MG】第八回卒業式(卒業生11名)
- 9月 2日
 - 【MG】A.K.ファウスト(後の第六代校長)、妻のクリスティーンと共に来日し東北学院教授となる
- 9月
 - 【MG】L.M.パーウェル着任
 - 【MG】ゾーフル休暇で帰国 ワイドナー校長代理
 - ・現津田塾大学創立
 - ・仙台市に電話開通

^{注1}「日本災害史事典 1868-2009」では、死者数 26,360 人と発表されているが、ここでは J.P. モール夫人により書かれた死者数 35,000 人をそのまま表記することとした。

- 1901(明治34)年 3月30日 【MG】第九回卒業式(初めて卒業式が3月に行われた、卒業生8名)
- 4月 【MG】学年開始が初めて4月になる
- 7月11日 【MG】クリスティーン(ファウスト夫人)、急病により死去
- 9月 【MG】C.B.パイファー着任
・押川方義、学院長辞任【TG】
- 1902(明治35)年 3月 8日 【MG】校舎全焼により仮校舎片平丁69番地2棟の日本家屋を借りる
- 4月26日 【MG】第十回卒業式東北学院講堂で行う(卒業生8名)
- 5月 【MG】ワイドナー病氣療養
- 8月 【MG】ズーフル帰任
- 1903(明治36)年 12月 【MG】校地購入 市内東二番丁135～138番地
- 3月 ・東北地方凶作
- 3月28日 【MG】第十一回卒業式(卒業生3名)
- 4月～6月 【MG】第十八年度授業開始延期
- 6月22日 【MG】ズーフル、ワイドナー、パーウエル連名で外国伝道局に辞任願提出
- 11月 ・「平民社」設立
- 1904(明治37)年 2月 ・日露戦争(～05.9)
- 2月 3日 【MG】ズーフル、ワイドナー、パーウエル辞任を撤回
- 6月 2日 【MG】「第一校舎」献堂式
- 7月 2日 【MG】第十二回卒業式(新校舎における最初の卒業式、卒業生4名)
- 1905(明治38)年 1月 ・旅順開城
- 3月 ・奉天の大合戦
- 4月 1日 【MG】第十三回卒業式(卒業生4名)
- 5月26日 【MG】久保田文部大臣来校視察
・日本基督教女子青年会(YWCA)創立
・ポーツマス条約調印
- 1906(明治39)年 3月 ・満州鉄道会社設立
- 3月16日 【MG】宮城女学校基督教女子青年会創立
- 3月31日 【MG】第十四回卒業式(卒業生11名)
- 1907(明治40)年 1月 【MG】ワイドナー休暇帰米
- 1月 ・「平民新聞」創刊
- 3月31日 【MG】第十五回卒業式(卒業生20名)

- 6月11日 【MG】外国伝道局、宮城女学校の運営権を「宮城女学校運営委員会」に委譲することを決議
- 9月 【MG】 K.I.ハンセン、L.A.リンゼイ来日
- 1908(明治41)年 1月 【MG】校地の西南隣接地、市内東二番丁139番地～ 140番地購入
- 3月28日 【MG】第十六回卒業式(卒業生16名)
- 4月 6日 【MG】ズーフル帰国のため仙台発
- 4月 7日 【MG】 H.K.ミラー、第四代校長就任
- 1909(明治42)年 3月27日 【MG】第十七回卒業式(卒業生16名)
- 8月22日 【MG】ワイドナー再来日、第五代校長就任
- 1910(明治43)年 4月 2日 【MG】第十八回卒業式(卒業生20名)
この日、日本人教職員一同と在校生一同からスクールカラーで作られた校旗が学校へ寄贈される

参考：『天にみ栄え—宮城学院の百年』1987年より

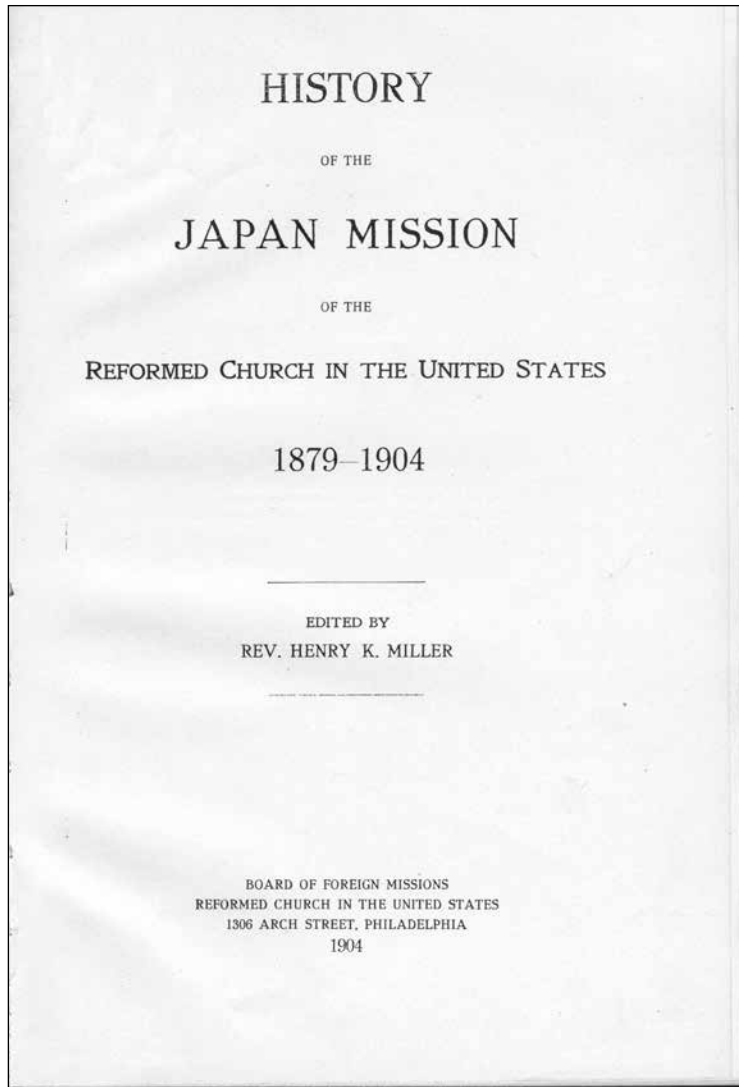
本文に登場する宮城女学校の宣教師たち

名前	宮城女学校教師就任年～退職年
	役職名、担当教科等
1. エリザベス(リズィ)・R・プールボー	1886年9月～1893年7月
	初代校長、聖書・英語
2. メアリー・B・オールト	1886年9月～1888年6月
	英語・聖書、W.E.ホーイと結婚
3. エマ・F・プールボー	1888年9月～1893年7月
	英語・聖書・音楽、 E.R.プールボーの妹
4. メアリー・C・ハロウエル	1891年11月～1898年7月
	英語・音楽
5. ジャイラス・P・モール	1893年9月～1894年8月
	第2代校長、英語・聖書
6. レナ・ズーフル	1894年9月～1908年7月
	第3代校長、聖書・英語
7. リリー・M・ロールボー	1897年9月～1900年3月
	校長代理(1899年)、英語
8. サディー・L・ワイドナー	1900年6月～1913年7月
	第5代校長、聖書・英語
9. ルーシー・M・パーウェル	1900年9月～1908年7月
	英語・聖書
10. キャサリン・B・パイファー	1901年9月～1904年9月
	英語
11. ポール・L・ゲルハード	1900年5月～1905年6月
	英語・聖書、 東北学院教師
12. ヘンリー・K・ミラー	1908年3月～1909年3月
	第4代校長、聖書、 山形・秋田へ伝道活動
13. アニー・M・モール	1893年9月～1894年7月
	J.P.モール夫人 副校長、英語・聖書

14. アンナ・M・シュネーダー	D.B.シュネーダー（東北学院第2代院長）夫人 「O MURA SAN」筆者
15. ミセズ・S・Sスナイダー	シルヴァナス・S・スナイダー（東北学院教師） 夫人

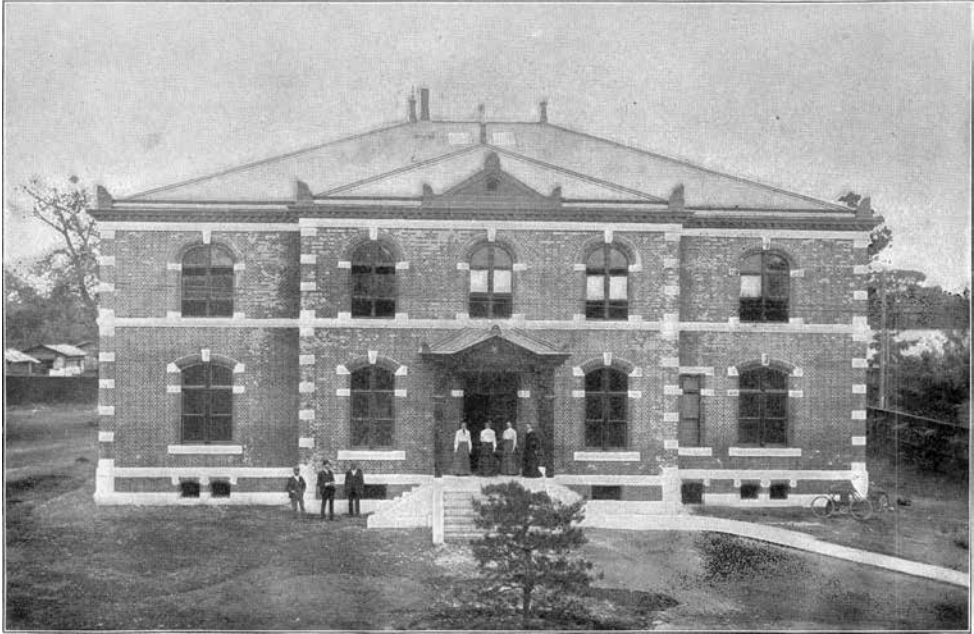
参考：

- ・「宮城学院資料室年報 信・望・愛 2011年度・2012年度合併号(第18・19号)創立125周年記念特集 宮城学院の宣教師群像 Since1886」より
- ・「東北学院百年史」(1989年)351頁より

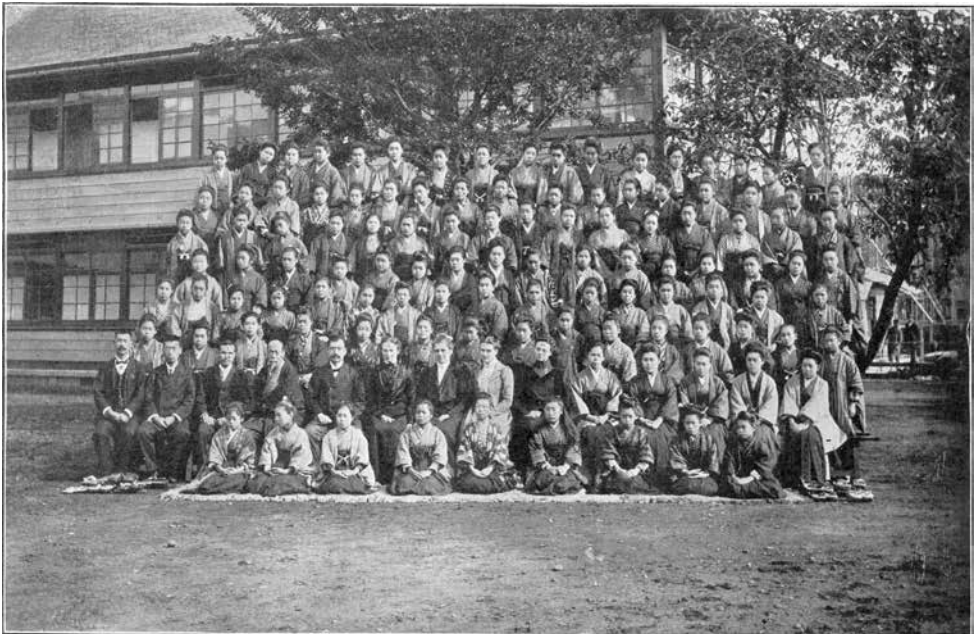


合衆国改革派教会の日本伝道における歴史
1879-1904

編集
ヘンリー・K・ミラー
合衆国改革派教会外国伝道局
1904年発行



クリスティーン・ヴォルマー・ファウスト記念館、仙台



宮城女学校の教員と生徒たち

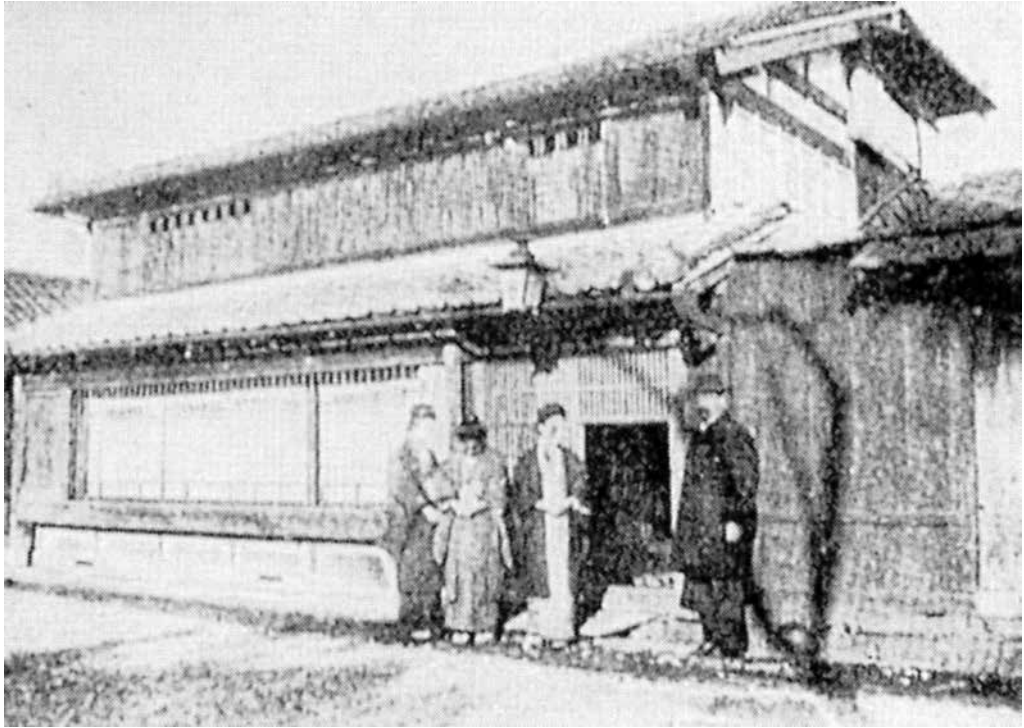
過去を振り返って

路傍の道標は、長い時の経過と歩んできた遠い道のりを示しています。いま、私たちは海外伝道活動の歩みの中で重要な時点に到達しました。ここで歩んできた道筋を振り返り、どれほどの前進を遂げたかを知ることは有益です。山登りでは時々足を止めて登ってきた道を振り返って見て、どのくらい遠くまで来たかを確認する時ほど登山者が勇気付けられることはありません。それによって登山者は自分の方位を認識し、周囲の広がりと同概観をより明確に判断することができます。

私たちの海外伝道活動の歴史においても、いまその時期に来ました。ここで一旦歩みを止めて過去を少し振り返って見ることは非常に価値があり、大きな満足を得られると思います。そうすることによって、面前の活動についてより良い見解を持つことができるでしょう。仙台の宮城女学校で、今後の宣教活動を行う術を与えてくれる教会の若い方々には、私たちの女学校の歴史について少し知っていて欲しいと思います。また同時に、かつてこの伝道活動の第一歩を踏み出し、その草創期を見守って来られた先人たちは、かの地で行った活動の成果を示す萌芽のかすかな光を得て歓喜することでしょう。まさに彼らは、ワシントン図書館（ママ）のモットー‘自ら助くることのできない者を助けよ’の標語を確実に実行しました。さらに、真っ先に我らの最初の宣教師を日本に派遣し、その成果を目撃し、幾多の尊い魂をイエス・キリストへと導く一助を担ったことを知ることは、崇高な先人たちにとってことさらに大きな喜びにちがいありません。当時は、最初の宣教師を派遣することに意味があり、そしてどこよりも先駆けて女学校を設立することが重要でした。それはこの女学校が日本の東北地方の人々が従来持っていたものと組織や目的において著しく異なるものだったからです。しかし、神は約束を守られ、神のために働く者と共におられます。ある者は種を蒔き、ある者は水をやり、そして神が豊かに実らせてくださいます！

宮城女学校の歴史

最初の婦人宣教師教師ミス・リズィー・R・プールボーとミス・メアリー・B・オールトは、1886年にアメリカから派遣され、同年、元校長職の人物が所有する日本家屋において宮城女学校を開設しました。約1年後ミス・オールトは女学校を退職し、W・E・ホーイ牧師（現在、博士）の献身的な配偶者となりました。後日ホーイ氏は中国へ転属しました。1888年、ミセズ・ホーイの後任としてミス・エマ・F・プールボーが着任し、姉のリズィーと共に二人の姉妹は熱心に且つ誠実に女学生たちを指導し、女学校をより堅固なキリスト教精神に深く基づいた学校とするために尽力しました。1891年11月、ミス・メアリ



宮城女学校創設時の教室



宮城女学校創設時の寄宿舎

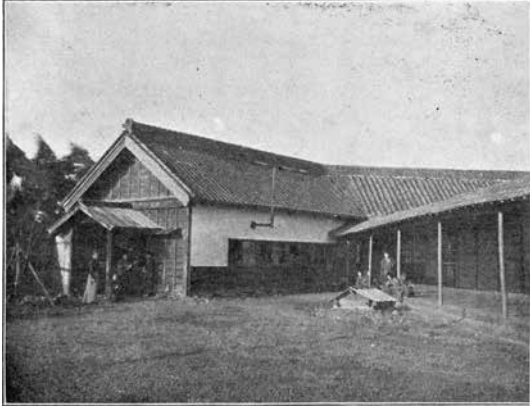
ー・C・ハロウェルが来日し、熱心に絶えず誠実に女学生の教育に彼女の青年期を捧げました。1893年7月、プールボー姉妹は帰国し、彼女らが捧げた献身的な奉職に対し教会は深い感謝の念を表しました。ミス・リズィー・R・プールボーは現在ドクター・サイラス・コート夫人となりました。同年9月にはドクター・J・P・モール夫妻が着任し、ドクター・モールが女学校の校長に就任しました。夫妻と共にミス・ハロウェルが一年の任期で着任しました。1894年8月、筆者ズーフルが着任し校長に就きました。ミス・ハロウェルと共に遂行したその後の三年間の業務内容は、教師3人が行う仕事に匹敵するものでした。1897年8月にはミス・リリー・M・ロールボーが着任し、しばらくの間（1年間）、この3人の婦人たちが女学校の‘宣教師隊’を結成していました。その後、ミス・ハロウェルが休暇で帰国し、アメリカにおいて日本の神戸に在職中のロバート・R・ジル氏と結婚しました。1900年3月には、ミス・ロールボーが健康を害して帰国を余儀なくされ、その後伝道局を退職しました。ミス・サディー・L・ワイドナーは1900年6月に着任し、同年9月、ミス・ルーシー・M・パーウェルが来日しました。1900年12月下旬、筆者が休暇で帰国、その間ミス・ワイドナーが女学校の校長職代理を務めました。1901年9月、ミス・B・キャサリン・パイファーが着任しました。1902年8月、休暇を終えて筆者が日本に帰任し、女学校の教員兼校長の職務を再開しました。在日の初年と最後の年に、ミセズ・S・S・スナイダーが音楽の授業を担当し、H・K・ミラー牧師とP・L・ゲルハート教授が数科目の授業を代講しました。ミラー氏は校長が病臥中、ゲルハート氏は校長が渡米期間中の授業を代講しました。



火事で全焼した校舎



火事で焼失した木造校舎跡



火災後の仮校舎



火災後の仮校舎



仮校舎時代のズーフル

火事

1902年3月、火災〔1902（明治35）年3月8日〕のため全校舎が焼失し、その後1年間宮城県の前知事が一部厩舎として使用していた建物で授業を続行しました。追加の校地が購入され、1903年1月24日には正式に女学校の所有地となりました。W・E・ランペ牧師の懸命な尽力により、広くて設備の整った新しい寄宿舎が無事完成し、9月1日までは入居できる運びとなりました。縁が御影石で装飾されたレンガ造りの立派な会堂「クリスティーン・ファウスト記念館」の礎石が1903年9月10日に設置されました。

幹事

女学校の幹事職は3名の日本人男性；K・Y・藤生牧師、Y・佐伯氏、T・早坂氏〔藤生金六、佐伯陽一、早坂哲郎〕が務めてきました。前述の最後の者は、女学校創設時以来、女学校との関わりを持つ人物です。



新寄宿舎全景 1903年9月落成



建築中のファウスト記念館(第一校舎)

教職員

現在、教職員は4名の未婚婦人宣教師、日本人男性7名、日本人女性6名で、この中の最後の1名のみが、わが校の卒業生です。



1903年時の宮城女学校の日本人教員たち

成果

ここに至るまでの種蒔きと水を与え育て続けた年月、私たちの期待を超える生徒数の増加によって、神は私たちの働きを豊かな恵みをもって祝してくださいました。25年前、この帝国全土には、日本人女性、教師、バイブル・ウーマン、母親の誰一人として、アメリカ合衆国改革派教会と最小の関係すら持っていませんでした。しかし今、周りを見回して見ると強力な力が働いて数々の素晴らしい変化がもたらされました。ある卒業生は日本人のキリスト者と結婚するために、遥か遠くのブルックリン N・Y・へ渡航し、また別の女性はホノルルで日本人牧師の妻となり、また1人は、日本の最北端の地で、現地の先住民アイヌの人々の間で活動している日本人の妻となりました。さらに、神戸で幼稚園の立派な教師となった女性もいます。また、数名は著名な指導者の妻となって西日本地域で暮らしています。別の5名は、宮城女学校の熱心な教師となり、その他多くは篤い信仰心を持つバイブル・ウーマンとなって、仙台、東京、山形の三地域に任命されました。1人は東北学院の日本人校長の妻に、多数は私たちの伝道師の忍耐強い妻に、他の者は役人の妻となりました。このように、かつて神の全能の力とイエス・キリストの贖いの愛について何も知らずにわが女学校に入学して来た娘たちが、やがてキリスト者の妻として、キリスト者の母親として、キリスト者の教師として、異教徒たちの暗闇の中にあって周りの闇を照らす光となっています。今では、家族の祭壇が偶像崇拜の神棚に代わって置かれ、幼い子どもらが、無言の木造や石造の偶像の前でその小さな手を合わせて叩く代わりに、たどたどしい片言で‘イエス’の名を呼び、天国の神に祈りを捧げる姿に出会うのです。過去6、7年間に日本で生まれた20人の子どもの母親たちは宮城女学校の卒業生です(ママ)。その他多くの娘たちは卒業こそしませんでした。彼女らの魂にはより高邁な理念が浸透していました。子どもたちが自ら祈る日が来るまで、母親は彼らのために祈り続けます。いつの日か、彼女ら自身が子どもらにイエスと彼の愛について教えることができた時、この女性たちにとってどんなに大きな喜びとなることでしょうか！3人の子どもの母親は、次のように書き記しています。「神の恵みによって、私は喜びのうちに私の勤めを行い、子どもたちを主の愛する子として育てるよう努めています。宮城女学校に入学していなかったなら、私の世界観や人生観は今とは大きく異なり、現在の私とは全く違う女性になっていたことでしょう。」51名の娘たちがこの学校を卒業し、その中の1人を除いて全員が卒業の時にはキリスト者になっていました。2人は、救い主イエス・キリストにあって希望と喜びのうちに死を迎えて永遠の眠りにつきました。



京田せつ(宮城女学校第3回生)
幼稚園の教師

今後の発展の可能性

宮城女学校は、今はまだ幼少期にあります。未来にはなお一層の発展を期待しています。現在の学生 120 名が、今後どのように遠大な影響力を発揮するかを誰が予想できるでしょうか？この活動の進捗は、時に遅く感じられますが、後ろを振り返って見れば我々の努力の跡は自ずとはっきり示されています。まさに、「命令に命令、規則に規則」（イザヤ書 28：10）です。しかし、未だしなければならぬことは山積しています。私たちの手が届いていない日本の娘たちは未だに沢山います。今日に至るまで、この活動のためにあらゆる方面で支援の手を差し伸べて来てくださった全ての皆さまに、神の恩寵がありますように。そしてまた、神が今後も変わりなくこの女学校を祝し、多くの人々の心を動かして、さらにこの活動を支援してくださいますように。私たちが日本の女性の地位向上を図ることは、ただ単にこの国に留まることなく全世界の人々の人間性の向上に貢献するものと考えます。



パーヴェル、ズーフル、ワイドナー



校旗

キリストの地上での生涯において、イエスの身の回りの世話をし、十字架のもとに最後まで留まり、次の日の早朝に埋葬された墓場を最初に訪れた慎ましい婦人たちが存在していたように、いま、日本においても数人の女性たちがイエスの子どもたちの世話をしています。まさに主のみ言葉「これらの私の貧しい兄弟の一人に汝が成したことは、私にしたと同じである」(マタイによる福音書 25 : 40) を彼女らは身をもって示しています。

生徒数の増加

バイブル・ウーマンの活動の評価は、女学校の卒業生数の増加に反映して高まりました。8年前、婦人宣教師のヘルパー〔外国人宣教師の助手〕の数は多くて2名、バイブル・ウーマンは2、3名しかいませんでした。しかし現在は、ヘルパー4名、バイブル・ウーマン13名と増えて、その中の3名を除く全員がこの女学校の卒業生で占められています。

活動の多様性

仙台市内や近郊での日曜学校、定期的な教会礼拝、婦人会、祈祷会、特別伝道集会が行なわれる場所にはどこへでも、バイブル・ウーマンはいつでも率先して手伝ってくれます。元来日本人は音楽好きで、特にバイブル・ウーマンは在学中その方面で優れた教育を受けているので、こうした教会の様々な奉仕活動には、なくてはならない貴重な存在となっています。

日曜学校

バイブル・ウーマンが指導する日曜学校活動は、かなり広範囲にわたっています。私たち所属の外国伝道局と関わりのある日曜学校は20箇所あり、そのほとんどに2人、他では3ないし5人のバイブル・ウーマンがついています。日曜の朝、この全ての場所に時間に間に合うように行くためには、仙台を6時には出なければなりません。従って、彼女らは夕方まで帰宅できません。バイブル・ウーマンは日曜学校の指導を手伝いますが、場合によっては全てを1人でしなければなりません。彼女たちはオルガンを弾き、‘主を称えよ’や他の救いの讃美歌などを子どもらに教えます。子どもたちがイエスやイエスの愛の物語を生まれて初めて耳にするのは、多くの場合こうしたバイブル・ウーマンの口を通してです。数年後に実を結ぶことになる真実の種は、このようにして神の幼な子らの心に蒔かれていきます。あらゆる階層の家庭の子どもたちがこうした日曜学校にやってきました。これらの子どもたちを介してバイブル・ウーマンを自宅に招くようになります。親の中には、自分の子どもが日曜学校に通っていることさえ知らず、それが分かると子どもに日曜学校へ行くのを禁ずる親がしばしばいるので、家庭訪問をする時には訪ねる側の配慮が必要となります。また、バイブル・ウーマンの影響を受けて、日曜学校に通っていた少女たちが宮城女学校への進路を見つけ、バイブル・ウーマンのように自分も将来役に立つ人間

になるための訓練を受けたいと思うようになります。「汝のパンを水に投げよ。そうすればいつか汝もそれを見いだすであろう」(コヘレトの言葉 11 : 1)

婦人集会

大きな影響を与えるもう一つの活動は、婦人集会の活動です。婦人宣教師教師(ママ)、若しくは宣教師の妻が集会の全般的な指示を与え、その指示のもと、バイブル・ウーマンが実際に指導します。このような集会では、少し内気な女性がバイブル・ウーマンに心を開く姿がよく見受けられます。それは福音書の講話をするバイブル・ウーマンが自分と同じ日本人女性で、彼女らなら女性特有の難しい問題も理解してくれると考えるからです。こうした集会に出席する人たちは、自宅への訪問も自然に受け入れるようになります。

キリスト者へ導くための素地

日本の女性の中には、多くの迷信によって精神的に束縛されている気の毒な女性たちがいます。ある女性は子どもが言うことを聞かない時、部屋中を100回行ったり来たり歩き回り、子どもが従順な子になるよう祈りながら、偶像の前に置いた器の中に豆を一粒ずつ入れて歩きます。また、別の女性は子どもが病気になると、子どもの病気回復を願って自分の好物の食べ物を断つ誓いを家の氏神様に立てたりします。こうした迷信に捉われた女性たちに、より良い生き方を理解させ、目に見えない唯一の神を信じさせ、神は「‘霊’であり、神を崇める者は霊と真をもって崇めなければならない」(ヨハネによる福音書4章24節)ことを明確に説くのは容易なことではありません。しかし、バイブル・ウーマンが女性たちとより親しくなって彼女らの信仰、家庭生活、個々の苦しみを知ることができれば、彼女らに熱心に働きかけ、彼女らのためにより賢明に祈ることができます。やが



バイブル・ウーマンの宿舎

て、バイブル・ウーマンによる辛抱と忍耐の数週間にわたる聖書の講話を続けた結果、ついに、キリスト教の信徒として受け入れてもらうために洗礼を受け、今度は、バイブル・ウーマンに代わって彼女自らが良き訪れを友人に伝え、家族には神の恵みを伝える使者となる姿を見て、バイブル・ウーマンは大きな喜びを味わうのです。バイブル・ウーマンにとって、自らの働きによってこのように実り豊かな成果を得る機会が与えられることは、なんと素晴らしい恩恵でしょう！このように信仰の篤い女性たちは、イエスの全人類に対する愛について日曜学校の子供たちや婦人集会の母親たちに宣べ伝えているのです。

特別な活動

バイブル・ウーマンには、時々様々な活動の依頼があります。婦人宣教師が婦人集会や子ども会のために区域外の伝道所へ出かけることがあります。そのような時はいつもヘルパーかバイブル・ウーマンが同行し、通訳をし、彼女ら自身も話をして集会の手助けをします。時には集会の参加者が予想を超えて大勢来た時などは、彼女らが居てくれるので非常に助かります。私たちは当地にいる同労者を支援するために来日したのですが、自らも家庭訪問の大事な任務がありますので、ヘルパーやバイブル・ウーマンたちに私たちの活動の手伝いを頼むことがあります。単独か、或いは外国人婦人に同行するかによらず、バイブル・ウーマンの活動の役目は極めて大きいのです。



1903年10月14日～16日に開催された第一回婦人活動者会議

伝道師の妻として

バイブル・ウーマンの中には伝道師と結婚する者もあり、婚姻後は厳密にはバイブル・ウーマンと呼ばれることはありませんが、真のキリスト者活動家として活動を続けます。

婦人活動家の会議

在日宣教師社団に関わる伝道師の妻やバイブル・ウーマンらすべての婦人活動家のために、1903年10月14日から16日に仙台の二番丁教会で会議が開催されました。私たちにとってこのような会議は初めてのことでしたので、出席者全員、特に支部からの参加者にとっては英気を新たに作る良い機会でした。修練では祈祷会、研究課題についてのレポートの読書会、討論会があり、終始有益な内容でした。この会議では参加者間の相互理解と共感が生まれ、さらに、日本における「キリストのみ国」の業を推し進めるための一歩であると感じました。

バイブル・ウーマンのための祈り

過ぎし数年間、バイブル・ウーマンたちは、尊い福音の種を蒔き、主のみ国のために人々を導いて来ました。しかし、彼女たちの奉仕活動がどれほど崇高でいかに遠大なものであったかを、私たちは「最後の大いなる日」において初めて知ることでしょう。このレポートを読む全ての方々が、「主のみ座」の前のバイブル・ウーマンと彼女らの活動を心に覚えてくださることを願います。そして、いつの日か、日本の人々がキリストを彼らの主であり、王として認める日の実現のために、今後もバイブル・ウーマンが神の大いなる業の担い手として用いられますよう祈ります。

活動の始まり

数年前のある午後、仙台の我が家に幼い女の子がやって来て、近所に住む瀕死の状態にある人を助けて欲しいと言って来ました。気の毒さと好奇心と苦しんでいる人を助けたいという複雑な思いで私はその人が住む小屋（住宅とは言えない）へ行きました。しかし、私がそこに着いた時には、もうすでに病人は息を引き取っていて、この世の苦しみから解放放たれていました。彼の寝床は古びた薪小屋の固く冷たいむき出しの床で、覆いものが厚紙だったことを思えば、日頃の彼の苦しみがいかばかりであったか想像に難くありません。

あの小屋とその住人の光景を私は生涯決して忘れることはないでしょう。この出来事がきっかけで、極貧生活の中で打ちひしがれ、絶望の淵にいる仙台の人々の中で奉仕活動を始めることになりました。

実施のための組織づくり

やがて、この事例が多くの中の一例に過ぎないことが分かりました。しかし、そのように大掛かりな活動を1人で実行するには、自分が余りにも無力だと痛感したので、宗派を問わず支援の手を差し伸べてくれる在仙の教会に相談をし、各教会から2名ずつ教会員に協力を求めることになりました。間もなく慈善協会が結成されました。赤貧にある人たちは、人を助けたいと思っている人からは進んで援助を受ける、ということが分かりましたので、私たちは願い出た全ての人を訪ね、彼らが真に生計が立てられないほど困窮しているかを調べることにしました。その年の冬、私たちは雨と寒さと雪と泥の中を、支援する住民の家々を何度も訪ねて回りました。その結果、私たちは一つのことを気付かされたのです。それは彼らに福音書を説く前に、まず病人には薬を、空腹の者には食べ物を、裸の者には着るものを、冷たい床に寝ている者には暖かい寝具を与えることこそ、私たちが真っ先にしなければならないということでした。体を病み、空腹と寒さで体が凍えている人、寝床のない人たちには、肉体的な苦しみのない人とは違い、福音の真実を容易に理解することはできません。

興味深い思い出

あの厳しく辛い冬を振り返ると、幾多の惨めながらも楽しい思い出が心に甦ってきます。特に鮮明に心に浮かぶのは、年老いた夫婦とその親族3人にまつわるものです。彼らは、アメリカの農民が家畜を飼うことすらためらうような古ぼけた小屋に住んでいました。床はむき出しの土間で、壁には数枚の古いむしろが掛けてあり、それを通して昼間の

嵐や夜間の突風が唸りをあげて小屋の中に容赦なく吹き込み、おまけに屋根は穴だらけで雪や雨がでこぼこの土間のそこそこに水たまりを作っていました。その赤貧の人たちは、日夜‘わらじ’という藁で編んだ安物の履物を作って生計を立てていたのですが、高齢に加え、餓死寸前の空腹と寒さと苦痛で疲れ果て、仕事は一向にはかどらず、‘わらじ’は少ししか作ることができませんでした。そこで私たちは、アメリカの友人から送られてきたフランネルの柔らかく暖かい布地を使って、早速彼らのために長着を作りました。彼らは冷え切った体をそれで覆って見たり、嬉々として子どものようにどれにしようかと言いつけ合う様子が可笑しくて笑いを誘いました。



1903年12月 仙台自営救貧所入所者と共に

宮城病院

宮城病院〔現東北大学附属病院〕に勤務するキリスト者の日本人医師は、私たちの病院伝道活動に非常に協力的でした。治療を受けに病院へ行くほどの体力がなく自宅で寝たきりの病人の面倒を彼はよく見てくれました。約6年の仙台滞在期間中、私はこの病院に通い自由に入院患者たちを訪ね、一緒にお話をしたり、彼らのために歌を唄ったり、食欲が出るような美味しい食べ物を持参したりしました。この間に、多くの人が救い主に信仰を誓って受洗しました。残念ですが、紙面の都合によりこの病院で行われた伝道活動の詳細については省略させていただきます。

仙台宣教師救済委員会

私たちの在日宣教師社団以外の会員も、機会が提供されれば仙台で奉仕活動を行っていました。その中の2人が救済の必要な貧しい境遇にある人の世話をする施設を開設するた

めに 50 ドル近くの寄付を集めることができました。後日、この基金は在仙の全プロテスタント宣教師の団体が慈善活動を組織的に推進させるために救済委員会を設置した時にその新しい団体に引き継がれることになりました。そしてついに、救済委員会は‘貧民の家’の設立に漕ぎ着けました。この施設では、支援を必要とする人に仕事、食事、住居を提供し、宗教的な指導も行います。団体の会員は、募金を集めたり慈善訪問を行う等この事業に関わる全ての活動を行います。この活動は単に婦人だけのものではなく、男性も多くの役割を担っています。

1896 年の大津波〔明治 29 年、明治三陸地震津波〕

私たちが仙台在住の間、1896 年 6 月 15 日の大津波が日本の東北沿岸を襲い、約 35,000 人の命が奪われ、負傷者と家屋を失った者の数はそれを優に超えていました。モール氏と私の 2 名が、被災した沿岸に赴いて罹災者支援にあたる役目を任せられました。宮城県知事からの書簡を携帯し、町村を移動する際の案内役として警察官数名が同行しました。この時に私たちが見聞きした光景や騒音を二度と再び体験することがないように願うばかりです。村のほとんど全てが流出されてしまった場所や、波が内陸部 2 マイル〔約 32km〕にまで到達し、ある地点では、標高 80 フィート〔約 24m〕にまで達していたことが、高木の枝々に引っかかっている残骸が無残にも示していました。よく見ると、こちらには小さな‘ゲタ’（木製の履物）の片方が、あちらには引きちぎられた髪の毛の束や、倒壊した家の家具の一部などが散乱し、それらがかつて繁栄していた漁村に残された全てと知って、哀れで胸が押しつぶされそうでした。町の荒廃したそのような姿は真に無残なものでした。海岸沿いに建設中の急ごしらえの仮設病院と騒音が悲痛さを誘いました。私たちは病人と、家を失った人々の苦痛を少しでも和らげようと最善を尽すしかありませんでした。また、このために心ある友人たちから贈られてきた災害見舞金で、知事が持参すべき必需品について予め知らせてくれていた物資を取りあえず購入し、かなりの物品を持参することができました。この任務は心身両面で辛く耐え難いものでしたが、宮城県沿岸のこの大津波の被災地で過ごした 10 日間ほど、真から幸せに感じたことはありません。まさにそれは、「受けるよりも与えることの方がより祝福されている」(使徒言行録 20 章 35 節) ことを実感できたからです。小さな津波の‘ルース赤ちゃん’が見つかったのは紛れもなくこの場所でした。改革派教会機関紙の多くの読者は、その子の物語をすでにご存知かと思しますので、ここでは彼女について重ねて記す事はいたしません。

日清戦争

日本と中国との戦争〔1894（明治 27）年 7 月 25 日～1895（明治 28）年 4 月 17 日〕が勃発したのも私たちが仙台に住んでいる間のことでした。陸軍病院で傷病兵の中で過ごした時間は大変興味深く、周囲が病人や苦しんでいる人たちで溢れていたにもかかわらず、

本当に楽しいものでした。「汝がわたしの兄弟姉妹に行ったのは、私に行ったと同じである」(マタイによる福音書 25 章 40 節) という真実の言葉を表すものだからです。病院の院長は、当初私たちの活動に対してかなり反感を持っていましたが、それも徐々に薄れ、ついに病院の門戸が開かれて、私たちは自由に出入りできるようになりました。お正月には数多くの宣教師や日本人のキリスト者たちがこの活動に加わり、富裕な日本人や活動に関心のある人たちから寛大な献金が寄せられ、3,000 人の病床にある兵士たちにその容態に応じたご馳走を振る舞うことができました。気の毒な兵士たちがご馳走を美味しそうに頬張る姿を見て、本当に幸せでした。その後、特別に彼らのために印刷した 3,000 冊の聖書を贈り、加えて赤十字の小冊子も配布されました。そして、あれほどキリスト教を忌み嫌っていた医師が、立派に装丁された新約聖書を贈られ感謝の礼を述べて受け取りました。その冬の病院伝道活動によって兵士たちは「仙台軍人クラブ」をつくり、その結果数多くの兵士が受洗して教会員となりました。

山形における病院伝道活動

山形に滞在中、山形県立病院への出入りを許可されたので、約二年間その病院での伝道活動を行ないました。主な活動は、患者の間のキリスト教へ改宗して洗礼を受けた人と、その後の成果を確認し、医師や看護婦の洗礼の場に立ち会うことでした。紙面の関係でこの活動についての詳細をここで記すことはできませんが、その思い出は今でも大きな喜びを与えてくれます。

婦人の活動 宮城女学校の婦人宣教師教師による伝道活動

ミス・ルーシー・マーガレット・パーウェル

日本人の家族と親しくなる機会

外国人婦人宣教師教師は、直接伝道活動のための時間がもう少し欲しいと望んでいます。通学生の中には、大きな影響力を持つ地元の有力者の子女が多くいます。これまで私たちが日本人の家庭に出入りできるようになったのは、教え子を介してだけでした。現在、わが校の評判も良くなり、私たちが家庭訪問をする機会も大幅に増えました。私たちの訪問を受け入れてくれるばかりでなく、彼らの家庭に招いてくれるようにもなりました。教え子たちから私たちが最初に学んだ英語表現の一つは、「私の家に来てください」という言葉でした。こうした自宅への熱心な招待を、しばしば無理に断らねばならないことは私たちにとって耐え難い苦痛でした。私たちは出来るだけ全生徒の家庭を訪問するように努めていたからです。生徒の家庭環境を少しでも多く知ることは、私たちにとって重要な意味を持つと考えます。それによって、私たちが生徒をより良く理解し、生徒にもっと多くの援助の手を差し伸べることができるからです。

ある訪問の事例

婦人教師がある生徒の家を訪ねた時のことです。人力車から教師が降りる姿を目ざとく見つけたのは、門の近くで遊んでいたおそらく生徒の弟でした。外国人のセンセイ（先生）の到着を家族に知らせるために、その子は慌てて下駄か裸足のまま全速力で家の中に飛んで行きました。玄関では、生徒の母親と生徒自身と生徒の父親までもが勢揃いして出迎え、そのまま直ぐにその家の一番立派な部屋に案内されます。それから心からの歓迎を受け、日頃の娘への好意に対して両親は深く礼を述べるのでした。時には、家庭が貧しく通される部屋の広さが6平方フィート（3畳）にも満たない、家業で使用されていない唯一の部屋のこともあります。裕福な家庭の場合、通される応接間は日当りの良い、絹のクッションや毛皮製の敷物が敷かれた美しい部屋で、そこからは日本人庭師によってゆきとどいた手入れがされた広々とした見事な庭を見渡すことができます。しかし、住まいの造作の如何によらず、目の前にはお茶の入った小さな茶碗と、この家が用意できる選りすぐりの茶菓が置かれています。少しでも肌寒ければ火鉢（火箱）が用意されます。火鉢は丸い形状をしていて、床を覆っている分厚い畳の上に全員で座ります。こうした家庭訪問は私たちに多くのことを明確に示してくれます。それは、女生徒の今後の歩むべき道を示し私たちが彼女をその道へ導くための一助となるからです。つまり、女生徒が女学校での困難な専門的学業に耐えられるよう私たちが優しく助言を与え、またキリスト教の教えを説く時は率直な言葉で話し、女生徒が自分の立場をわきまえ、私たちをより良く理解できるよう彼らの娘を導いて欲しいということです。日曜学校への直接的な勧誘は、大抵受け入

れてくれるようになります。「日曜学校には誰が行ってもいいの?」と時々聞かれることがあります。そのやり取りの成果は、後日、生徒の弟や妹たちが日曜学校に出席する形となって表れます。また、別の事例では、キリスト教に関心を持っているある高齢の男性に、キリストの教えについて誰かを説明に行かせましょうか、と提案してみると、彼は喜んでその申し出を受け入れ、その結果、彼はいま受洗に向けての準備をしています。私たちがいとま乞いをする時、「外国人の先生がわざわざ来てくれて、なんて幸せなことか」と言って興味津々の隣人たちまでがその家の門の前に集まってくるのがよくあります。彼らもまた、同じように私たちと懇意になりたいと願っているのです。このように、一つの家庭訪問が、私たちの次の訪問への扉を開けるきっかけとなりました。



外国人婦人宣教師のヘルパーたち

伊藤みさほ(宮城女学校第10回生)、奥山ます(同)、藤沢やす(同11回生)、鈴木さだ(同9回生)

市外地域訪問によるキリスト教への関心の増加

女学生の多くは仙台の市外地から来ています。中にはクリスチャン・ホームの子女たちもいますが、恐らく近隣で唯一のクリスチャン・ホームで、大多数はキリスト者ではありません。しかし、この子らは通例入学後2、3年以内に改宗してキリスト者になります。遠距離出身の生徒たちも私たちを家に招待し、その家庭訪問は大抵実り多い成果をもたらします。私たちの活動には卒業生が1人同行して一緒に讃美歌や小型オルガンを運ぶ手伝いをしてくれます。卒業生の立ち居振る舞いや、歌ったり、オルガンを弾いたり、通訳をする彼女らの姿と技量など全てが、女学校のために良い影響を及ぼします。自然に親たちは私たちに快く会うようになり、友人や親類にも進んで私たちを紹介し、公共での伝道集会を開催するよう度々依頼して来るようになります。その集会では、生まれて初めて聞くキ

リストのお話しが語られます。また集会に来る出席者の殆んどがキリスト者なら、女性にとってキリスト教教育がいかに重要であるかを力説できます。このようにして親たちはわが女学校に関心を持つようになり、自分の娘をこの女学校に入学させて友人にも同じように勧めます。しかし、多くの人がキリスト教に興味を抱き、キリスト者教師に面談を求めに来て、宣教師の数が不足しているために、その希望をかなえてあげることができません。このように、一つの訪問が、結果として新たな訪問の機会をもたらすこととなります。

在仙の他校での活動の可能性

仙台はこの地方では教育の中心地であり、生徒の兄弟や多くの友人らは在仙の公立学校に入るためにこの町にやって来て、町の近辺の特段良い影響を与えそうもない民家に下宿します。私たちは、何とか彼らに援助の手を差し伸べたいと強く願っています。その上、この町にはいくつか大きな病院があり、わが校の生徒の友人が治療のために暫く入院することがあります。私たちの宣教とは関わりのない病院もまた、キリスト教の布教活動にとって素晴らしい機会と場を提供してくれると考えます。

日曜学校活動

婦人宣教師教師は、仙台及び近隣の町で日曜学校の監督と管理責任を負っています。

婦人集会

女学校の外国人婦人教師は、婦人集会に関心を持ち、時には自ら出席はしても、日本人活動家に指示を与えることは控えるのが通例です。

間接的活動

私たちができる最も効果的な伝道活動の方法は、間接的方法です。つまり、日本人活動家に助言をし指示を与えることです。日本のキリスト教伝道は、主として日本人活動家によります。私たちは彼らを訓練し、いかに生き、何をすべきかを一言一句教えることによって最善の務めを果たすことはできないでしょうか？日本の娘たちにとって、自国の姉妹たちから教えを受けてキリストへ導かれるのが最善ではないでしょうか？なぜなら、彼女らは同じ国民として後輩の考え方を理解し、同じ苦難を経験し、同じ障害を乗り越えてきたからこそ、真に必要なものが何かを理解できると思うからです。

役人のグループの中で

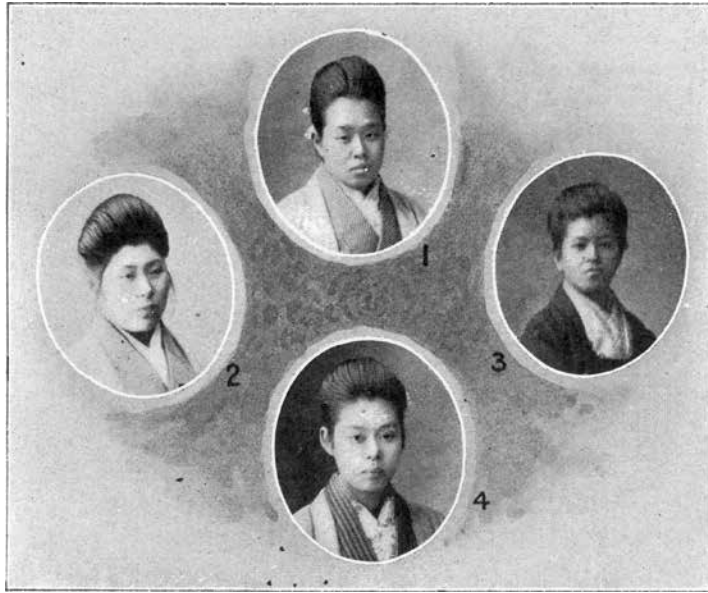
私たちが居住する仙台市の官職にある人たちの間で活動する機会がありました。ある時、数人の特権層の来賓が、あるクリスチャン・スクールを支持して公共の意見に敢然と反対して以来、今では私たちは町の役人たちの自宅に招待されるようになりました。そ

れ以候、私たちばかりではなく、私たちの仲間も同じように受け入れられるようになり、学校訪問の特別招待状が送られるようになりました。かくして、女学校の校舎が火事で全焼した時には、彼らの方から女生徒たちのために一時避難所が提供されることになりました。しかし、今はまだ、彼らとのこうした付き合いは、私たちが神の子であるが故に望まれている訳ではありません。願わくは、神が私たちをして神のみ名の栄光を表させ、彼らが私たちの内に神のみ姿を見て、全人類の父なる神として愛し、崇めるようにならんことを！

好機はあらゆるところに

こうして、常に、私たちがどちらを向こうと、キリスト者として仕える機会が常に私たちを窺っています。喜んで受け入れられる人がいる一方、ああ、何と多くの人が素通りするままにあることでしょう！神はかつて蒔かれた幾多の種を、豊かに実らせて祝福されました。未来においても、主のみ名によって、愛するみ子のために行われる業を、神が惜しみなく祝福されることでしょう。

婦人の活動 宣教師、牧師、伝道師の妻たちの伝道活動
D・B・シュネーダー夫人



バイブル・ウーマンたち

- 1.狩野みどり(宮城女学校第9回生) 3.イチムラセキ(不明)
2.高橋なみ(同10回生) 4.丹羽こま(同10回生)

海外事務局の訓令

私はこの在日宣教師社団で奉職する既婚夫人の中で最年長者の一人として、宣教師、牧師、伝道師の妻たちの活動について書くよう依頼されました。今から16年前、ペンシルヴァニア州サン・バリーでの送別礼拝において、海外伝道局から次のような訓示がありました。それは、「あなたの夫の面倒をよく見ること」でした。他の全ての御夫人方も同様の言葉を受けたものと確信しています。この務めを私は忠実に果たすよう努力してまいりました。そして他の方々も同様に遂行されたことと確信いたしております。

さらなる勤め

けれども、宣教師、牧師、伝道師の妻たちには、ただ単に夫の世話をしたり、家事に専念するだけに留まらない、遥かに多くの働きを果たすことができました。命の糧がないために飢えに苦しむ数多くの人々を周りに見ながら、妻としての勤めにのみ甘んじているわけにはいきませんでした。私たちはこの貧しい気の毒な境遇にある日本の姉妹たちを、何とかその暗闇の世界から命の光の世界へ導きたいと切望しました。

活動の詳細

私たちの中から1人が、いくつかの病院訪問と、傷病兵士たちの中での活動と、日曜学校活動のために各々の時間を充てることにしました。もう1人は、現在在日宣教師団に所属はしていませんが、当初からの本人の希望で多くの時間を後輩の教育と活動のための準備に当てました。しかし、彼女自身病気のために活動を休みがちでした。それにもかかわらず、この疲労困憊した母親は、夜に子どもたち全員を寝かしつけてから、彼女のクラスの女学生に聖書を教えるのが日課でした。さらに彼女は生徒たちとより親しくなるために、自分の夕べの数時間を充てていました。その上、日曜学校での活動やキリスト者とそれ以外の人たちへの家庭訪問も怠りませんでした。他の夫人たちも日曜学校活動の他に、信者ではない人のために自宅でバイブル・クラスを開いたり、病人や背教者や未信者を訪問し、信者を励まし、キリストへ導くための説得に努め、裁縫のサークルや祈祷会など、到底ここには書ききれないほど多くの奉仕活動に携わっています。牧師や伝道師の妻には実に広範囲に及ぶ大切な役目があり、活動を通して関わった婦人たちに、彼女らは計り知れない影響を与えています。特に、子どもの母親と親しくなることができれば、やがてそれは彼女らの愛と信頼を得ることに繋がっていきます。

後輩の活動

新しく着任する宣教師の妻たちは、日本語を話さずとも、良き知らせを広める目的に向かって既に行動を開始しています。「彼女たちに何ができるでしょうか？」と尋ねられたなら、そうですね、歌を教え（日本人は歌うのが大好きです）、集会ではオルガンを弾き、日曜学校に出席した幼い子たちに向かって微笑みだけで充分なのです！外国人の女性に会って優しく微笑みかけられたなら、子どもたちにとってそれにまさる励ましはないからです。彼女らに備わった声もまた、これまでの活動に大きな助けとなってきました。

日本人婦人活動家への祈り

日本の牧師や伝道師の妻たちのほとんどは、歌が歌えてオルガンが弾けるので、それによって夫の活動に大きな味方となっています。彼女たちは外国人宣教師の妻とほとんど変わらず同じ仕事をします。数多くの失望に遭遇しますが、一步一步、少しずつ道を探しつつ彼女たちは勇敢に前進しています。皆さまの憐れみと祈りが彼女たちには必要です。どうか、神の玉座に跪く彼女らを皆さまの祈りの中で覚えてください。

この短いレポートが、日本におけるキリストのみ国のために尽力される皆さま方に、更なる激励を与えてくれますようお願いしながら、神のみ名によって提出いたします。



明治期における宮城女学校のバイブル・ウーマンの活動 ～明治後期の年次報告から～

宮城学院女子大学 一般教育部准教授 栗原 健

明治期の東北におけるキリスト教宣教において、キリスト教女学校関係者から成るバイブル・ウーマンが果たした役割についてはよく知られている。彼女たちは家庭や病院を訪問して聖書を読み、日曜日には教会の礼拝や日曜学校において奉仕を行い、各地の伝道者を助けていた。宮城女学校出身のバイブル・ウーマンによる活動の内容については、その一員として活躍した吉田みさをに関するメアリー・ホーイ夫人の報告書が、『天にみ栄えー宮城学院の百年』（宮城学院、1987年）の288-290頁に掲載されている。しかしながら、これは1892（明治25）年という初期の時代の記録であり、バイブル・ウーマンの活動は長年にわたり継続して行くことを考えると、ホーイ夫人の報告のみではその全貌を把握することはできない。

幸いなことに、明治30年代から大正期にかけて改革派教会外国伝道局宛てに送られたバイブル・ウーマンの活動報告が、米国ペンシルベニア州ランカスター神学校内の福音・改革派歴史協会（ERHS、Evangelical & Reformed Historical Society of the United Church of Christ）に保存されている。2019（令和元）年8月に東北学院大学の資料調査チームと共に行ったERHSでの調査の際、1905（明治38）年春から1919（大正8）年春までの年次報告書を複写することができた。以下に掲載するのは、レナ・ズーフル校長の名で記された1905（明治38）年5月30日付の報告、1908（明治41）年6月19日付のリディア・A・リンゼイの報告、1909（明治42）年6月1日付のケイト・I・ハンセンの報告の原文並びに邦訳である¹。

1

最初の報告では、7名のバイブル・ウーマンの活動内容や人となりで紹介されている。筆跡は明らかにズーフルのものではなく、言葉遣いも英文としてはぎこちない。おそらく、ズーフルの指導を受けながら日本人の助手が記したものであろう。筆者については定かではないが、冒頭で紹介され、「私の教師であり助け手（my teacher and helper）」と呼ばれている川合きくの（結婚後は吉田姓）かも知れない。当時の女学校関係者の英作文能力

¹ レナ・ズーフルは宮城女学校第3代校長（在職期間：1894年～1908年）。リディア・A・リンゼイ（英語）、ケイト・I・ハンセン（音楽）は1907（明治40）年に共に来日し、戦争による中断を挟みながら1951（昭和26）年まで約40年にわたり宮城学院と歩みを共にした。

がうかがえる資料となっている。

報告書には、「オソノサン」「オチヨサン」と情愛を込めた呼び方が混じることもあり、障がいを抱えつつ熱心に活動を展開するメンバーへの敬意、厳冬の角田に旅する者の苦勞への気遣いがにじみ出ている文章も登場する。報告中で興味深いのは、上遠野たつのが荒町日曜学校と並んで「Shujikan」を訪ねているとの記述である。これは1879（明治12）年に完成した宮城集治監のことであろう。1903（明治36）年には「宮城監獄」と改名されていた筈であるが、ここでは旧い呼称で呼ばれている。

Miyagi Jo Gakko,
Sendai Japan. May 30th, 1905.

Dear Dr. Bartholomew:-

I herewith send a brief sketch of the work of each of the Bible Women who are employed here in Sendai. Their pictures were sent home a year ago in connection with the reports for the 25th Anniversary Report. I do not have pictures of any new Bible Women as the girls of the Class of 1904 and 1905 were all self-supporting except one and she is my personal helper and teacher. Two of the girls of the above mentioned classes became regular Bible Women very recently. One went to Tokyo and I have no special report of her work as yet. I mention the above so that you may understand why there are not many pictures sent for Bible Women just now. I will send the pictures of these two later. We were not certain whether they would stay permanently for the work, but they now think they will stay at least a year. I do not have reports of women working in Tokyo and Yamagata at present so will send theirs later with the report of general work of all the Bible Women.

Dr. Bartholomew we beg all of the patrons to pray especially for those whom they support.

With regards and kind wishes,

Respectfully submitted

Lena Juhl.

1919年8月 複製 1917年 5月 16日 1922年 4月

Miss Kawai.

Miss Kawai whom we have assigned to Mr. G. H. Moose, Drys Mill N. C. is not a Bible woman but a teacher in our Girls School now. She teaches some of the Bible Classes in the lower grades. She is a very valuable worker in that place. She also teaches other classes. The last seven months she was my teacher and helper and taught in the school, and the last three in addition to work mentioned acted as matron of our Girls School. She is one of our most staunch workers and a very strong Christian.

Miss Midori Kammo

Miss Midori Kammo assigned to Third Church Missionary Society care of Miss A. C. Pracht, 615 Franklin Street, West Baltimore Maryland, has been working under direction of Mrs. Lampe. She goes to Fukuda for Sunday School work once a week, this is a long and difficult trip but she and the other Bible woman going there have done excellent work. She also attends Sunday School and meeting every Sunday evening at Aramachi, also woman's meetings once a week at the same place. Besides this she visits the homes of that Kagisho (or preaching place). She has been very faithful in her work. With part of her small earnings she helps to clothe her younger sister who is now in school.

Miss Kama Niwa

Miss Niwa is Bible woman under the direction of Mrs. Cook. She attends women's meetings and Sunday School at Nagamachi and also helps at prayer-meetings Sunday evening service and Sunday School at Nibancho. She also does visiting with Mrs. Cook and helps in various other ways to extend the Gospel.

Miss Tatsuno Kadono

Miss Tatsuno Kadono goes to Shujikan and Aramachi Sunday School every Sunday and to Sunday evening service at Aramachi. She has charge of a meeting at Fukuda once a week for women and children. She helps in many other places where extra workers may be needed, such as at the Gospel Tent meetings. Miss Kadono being lame cannot get about as freely as others but still she is able to do a great deal for the Master!

Miss Sono Sekiguchi

Miss Sekiguchi goes to Shiroishi and Ogawara every Sunday for Sunday School. She has charge of the womans meeting at Miyamachi and goes to Arai Sunday School, and teaches some lady knitting several times a week. This lady is also receiving Bible instruction. O Sono San also helps out wherever needed. There are always calls for extra work to be done, such as special meetings, and tent meetings. She is very young and so cannot be sent out to distant points of work, but she does her work very well. Her father is a Jinricksha Man in Tokyo.

Miss Chiyu Takahashi

Miss Takahashi goes to Shiroishi and Ogawara for Sunday School every Sunday. She also goes to the womans meetings at Masuda. The trip to Shiroishi and Ogawara is a hard one. She also attends some of the prayer meetings in Sendai. O Chiyu San was sick for several months this winter, but has now entirely recovered. She is one of the patient and plodding kind of workers.

Miss Kanmari Yomiki

Miss Yomiki Kanmari had been a self-supporting girl while in school. She was out of school almost two years and was then engaged to a young man who expects to become an evangelist. She thus asked to be given work and said she wanted to begin work for the Lord. She goes to womans meetings at Masuda once a week, and to Nagamachi Sunday School, but attends prayer-meetings and assists wherever needed. She goes to Hakuda once a week with one of the other Bible Women. This is a very hard trip especially in winter. A long ride in Jinricksha, Basha (Omnibus) and a ride in the train. During the past winter when the trains were so very irregular on account of transferring of soldiers, the trip was anything but pleasant and easy. We often felt sorry for these Bible Women.

宮城女学校

仙台、日本。1905年5月30日

親愛なるバーソロミュー博士

当地仙台で雇用されております各バイブル・ウイメンの働きの短いスケッチを、ここにお送りします。彼女たちの写真は1年前、25周年記念の報告と一緒に送りしてあります。新しいバイブル・ウイメンの写真は、私の手元にはありません。1904年・1905年クラスの娘たちは、私の個人的なヘルパー兼教師役の1人を除けば、全て自費生徒だからです²。上記クラスの少女のうち、2名はごく最近、常勤のバイブル・ウイメンとなりました。1人は東京に行きましたが、彼女の仕事については私はまだ特別な報告はありません。私がこのことを言及したのは、現在お送りできるバイブル・ウイメンに関する写真がなぜ多くないのかをご理解頂きたかったからです。この2名の写真は後ほどお送りしましょう。彼らがこの職務に長期的に留まれるかは、私たちにもまだ定かではありませんが、彼女たちは、少なくとも1年は残れると今は考えております。現時点では、私は東京と山形で働いている女性たちに関する報告はありません。彼らのことは、後ほど全バイブル・ウイメンの全般的活動に関する報告と一緒に送りしましょう。

バーソロミュー博士、パトロンの方々皆様に、彼らがサポートしている人々のために祈って下さるようお願いいたします。

心をこめて、

謹んで提出いたします。

レナ・ズーフル

ミス・カワイ [川合きくの]

ノースカロライナ州ドライズミルのG・H・モース氏に割り当てられましたミス・カワイは、バイブル・ウーマンではありませんが、現在私たちの女学校の教員です³。彼女は低学年の聖書クラスのいくつかを教えています。職場において彼女は大変貴重な働き人です。彼女はそれ以外のクラスも教えています。過去7か月の間、彼女は私の教師であり助け手であり、学校で教えていました。後半の3か月においては、先に言及した仕事に加えて私たちの女学校の舎監もしています。彼女は最も信頼できる働き人の1人であり、大変強いクリスチャンです。

² Self-supporting students. 奨学金を受けずに学んでいた本校生徒。

³ モースについては詳らかでないが、文脈から察するに、おそらくミッションの支援者であり、その奨学金が川合に送られたのであろう。

ミス・ミドリ・カンノ [狩野みどり]

ミス・ミドリ・カンノは、メリーランド州西ボルティモア、615 Franklin Street ミス・A・C・プラハト方の Third Church Missionary Society に割り当てられ、ミセス・ランペの指導のもとで働いています⁴。彼女は週に1度、日曜学校での職務のために角田に行きます。これは長く面倒が多い旅ですが、彼女と他のバイブル・ウーマンたちは素晴らしい働きを為して来ました。彼女は日曜学校、毎週日曜夕の荒町での集い、また同じ場所における週1回の女性の集いにも参加しています。このほかに、彼女は講義所（または説教場）の家々を訪問しています。その職務において彼女は非常に誠実です。僅かな稼ぎの一部をもって、彼女は現在学校にいる年若い妹に衣類を与えてあげています。



ミス・コマ・ニワ [丹羽こま]

ミス・ニワはミセス・クックの指導のもとにあるバイブル・ウーマンです⁵。彼女は、長町における集いと日曜学校に出席し、また二番丁での日曜夕の祈祷会と日曜学校も助けています。彼女はまたミセス・クックと共に訪問も為し、福音を広げるためにその他さまざまな手段で助けています。



ミス・タツノ・カドノ [上遠野たつの]

ミス・タツノ・カドノは毎週日曜、集治監と荒町日曜学校、荒町での夕拝に赴いております。彼女は週1回、福田での女性と子どもたちのための集いも担当しています。助け手が必要なその他多くの場所、たとえば福音テントミーティングを彼女は助けています。ミス・カドノは足に障がいがあるため、他の者ほど自由に動き回れませんが、主のためになお彼女は多くのことを成し遂げることを得ています！



⁴ モースの場合と同様、ミッションの支援者であろう。「ミセス・ランペ」は、東北学院で1900年から1903年まで理事・英語教員として勤務していたウィリアム・E・ランペ宣教師の夫人である。

⁵ 「ミセス・クック」は、1903年から1905年まで東北学院で聖書を教えたハーマン・H・クック宣教師の夫人である。

ミス・ソノ・セキグチ [関口その]

ミス・セキグチは毎週日曜、日曜学校のため白石と大河原へ赴いています。彼女は宮町での女性の集いを担当し、荒井日曜学校に行き、週に数回女性たちに編み物を教えています。この女性たちは聖書の指導も受けております。オソノサンは、助けが必要な所ではどこでも助けています。特別集会やテントミーティングのように、追加の活動の召しが常にあるからです。彼女は大変年若いため、遠方での働きに派遣することはできませんが、自身の職務を大変よくこなしています。彼女の父は東京の車夫です。



ミス・チヨ・タカハシ [高橋千代]

ミス・タカハシは毎週日曜、日曜学校のために白石と大河原に行きます。彼女はまた、増田での女性の集いにもいつも赴いています。白石と大河原への旅は厳しいものです。仙台での祈祷会のいくつかにも、彼女は出席しています。オチヨサンはこの冬、数か月にわたり病気でしたが、現在は完全に回復しております。彼女は忍耐強くコツコツ働く種類の働き人です。



ミス・カンナリ・ヨミキ [金成よみき]

ミス・ヨミキ・カンナリは学校に在学中は自費生徒でした。彼女はほぼ2年学校を離れており、その後、伝道者になると期待されている若い男性と婚約しました。このため彼女は仕事を与えてくれるようお願い、主のために働き始めたいと述べました。彼女は週1回、増田での女性の集い、長町日曜学校に赴きますが、祈祷会に出席し、助けが必要などころではどこでも助けています。週に1回、他のバイブル・ウーマンと共に角田に行きます。特に冬期にはこれは非常に辛い旅です。人力車、馬車（乗合馬車）と列車による長い旅なのです。昨冬、兵士の輸送のため列車の運行が大幅に不規則になりました時には、この旅は全く不快で困難なものとなりました。私たちは、これらのバイブル・ウイメンのためにしばしば申し訳なく思っております。



1908 (明治41)年6月にリンゼイがタイプした報告書においても、バイブル・ウーマンたちの熱心な責任感が賞賛されており、悪天候などの際に職務を休みがちな「日曜学校教師」と対比する一文も見られる。ただし、高給を選んで他の雇用先に移る女性もいたことが言及されており、メンバーの出入りが少なくなかったことが読み取れる。手紙の末尾においてバイブル・ウーマン養成のための教育機関設立の希望が述べられているが、同様の主張は後年の報告書(例えば1914年6月10日付のクリストファー・モスによる報告)においても繰り返されることになる。バイブル・ウーマンの影響力が顕著になるにつれて、当時の宮城女学校における聖書教育では十分な知識と経験を与えられないことが、学校関係者の目にも明らかになって行くのである。

1908

REPORT ON EIBLE WOMEN'S WORK.

To the Board of Commissioners for
Foreign Missions of the Ref. Ch. in the U. S.,
Dear Brethren:

In all ages and in all countries, in the history of the Church women have done and are doing a great work for Christ's Kingdom. The Japanese women are no exception to this rule. Though Japan does not keep her women so closely secluded in the home as other eastern nations, yet we find that the great work of bringing women to Christ must be done largely by their own sex. The most aggressive of these women who are working so faithfully to bring a knowledge of Christ into their sisters' lives are the Eible Women. The majority of ~~our Eible Women~~ are graduates of Miyagi Jo-gakkō. Many of them were supported during their school life by the Mission or by individuals who were interested in them personally. But I am sure that it is not only ~~through~~ through a feeling of obligation to the Mission or of gratitude to their benefactors that these girls enter the ranks of the Eible Women. They have the love of Christ in their hearts, and through that love the desire of service for His Kingdom.

The work for the past year has been carried on by 23 women. Ten of these were girls who had graduated in March, 1907. These girls lived in the "Eible House" at the school, and pursued the Post-graduate Course, doing out for their work on Saturdays and Sundays and at other times outside of school hours when the work needed them. Their Post-graduate Course was finished last March, and then they were sent out to live in different towns and cities to assist the evangelists of those places. They do this in various ways. Unless the evangelist's wife can play the organ, the Eible Woman must do this and lead the singing so necessary to any church service. She is an important factor in the Sunday School, where she teaches a class and looks after all the children in general. If any children are absent, she finds out the reason. If new children come, she tries through them to enter the home, first in a social way, and then perhaps to teach the Word of God. She visits those who are sick and comforts those in sorrow. She also has charge of the Women's Prayer Meeting and the Sewing Circle, where she has need of all the executive ability that her school training has developed. So we find her a busy, faithful home missionary.

I have been, naturally, more in touch with the work of the Eible Women who remain in the school, and with the work of our under-graduates, who voluntarily offer themselves for the work. From the class which graduated in March of this year we have five girls who are taking the Post-graduate Course in the school. In addition to these, Mrs. Zaugg's, Miss Hansen's and my helpers are in the Eible House. Twenty-two girls from the upper

three classes have volunteered to help in the Sunday School work of Sendai and the neighboring towns. These girls could teach a lesson, patience and faithfulness to many Sunday School teachers at home. No matter how hard it snows, nor how hard it rains, they never complain or think of staying at home. Many of them have to ride from three to five miles in jinrikishas, while others must get up very early to take the train to their stations. Some teach in one town in the morning, and then go on to a different town where the Sunday School is held in the afternoon. And their classes are usually not the tastefully dressed children that anyone would delight to teach in America or in Japan, but they are for the most part dirty and unkempt. Often on their backs are tied crying babies, which they must stand up to "joggle" while their teacher is trying to make them understand some beautiful Bible lesson.

Each year, of course, some of the Bible Women leave the work-- some to enter homes of their own; some to go on with their education; and some to engage in other employment where they receive much higher wages. While the last fact may seem discouraging, yet it is partly compensated for by having other girls leave secular employment to become Bible Women.

When the students of North Japan College finish the Literary Course in the school, we do not consider them fitted to become efficient evangelists, to go out and teach the people about Christ, though they have studied the Bible throughout their Literary Course. But they must go on through three years of special preparation and study in the Theological Seminary. To be able assistants to these evangelists, to be able to do well and effectively the wide scope of work open to Bible Women, we feel that they too should have a special training in the Bible and methods of Christian work beyond that received in their Literary Course. Just as the work at home has felt the need and has demanded trained Christian women for the Sunday School, the Young Women's Christian Association and the Deaconess work, so the work here is demanding specially trained Bible Women. So we hope that in the near future our Mission may have what many other Missions already have-- a school where our Bible Women can become better equipped to hasten the coming of the Kingdom to Japan.

Respectfully submitted,

Sendai, Japan, June 19, 1908.

Lydia A. Lindsey.

バイブル・ウイメンの働きに関する報告
アメリカ合衆国改革派教会外国伝道局 理事会へ

親愛なる兄弟たち

あらゆる時代、あらゆる国において、教会の歴史では女性たちがキリストの王国のために偉大な働きを果たしており、[現在も] 為しつつあります。日本女性たちも、この定則の例外ではありません。日本では、女性たちは他の東洋の国々ほどは厳しく世間から離されてはいませんが、女性たちをキリストに導くという大きな働きは、おおむね同性の者によって為されなければならないということに、私たちも気付いております。キリストの知識を同胞の人生にもたらそうと誠実に働いている女性たちのうち、最も意欲的なのがバイブル・ウイメンたちです。私たちのバイブル・ウイメン [原文下線]のうち、大半は宮城女学校の卒業生です。このうち多くの者は学校生活の間、伝道局、または彼女たちに関心を寄せた個人によって支援された者です。しかし、これらの娘たちがバイブル・ウイメン

の職に就いたのは、決して伝道局に対する恩義や支援者への感謝からのみではないと私は確信しております。彼女たちは自身の心にキリストへの愛を持ち、この愛によって、御国のために働く望みを抱いているのです。

昨年度の働きは23名の女性たちによって為されました。そのうちの10名は、1907年3月に卒業した娘たちです。これらの娘たちは学校の「バイブル・ハウス」に居住し、特別聖書科〔一年制聖書専攻科〕を履修しつつ、土曜・日曜にそれぞれの職務に赴きました⁶。それ以外の時には学校の課外時間に、彼女たちを必要とする働きに出かけています。彼女たちの特別聖書科は昨年3月に終わり、その後は、当地の伝道者たちを補助するために他所の町や都市に派遣されています。彼女たちはこの務めをさまざまな形で果たしております。伝道者の夫人がオルガンを弾けない場合は、バイブル・ウーマンがこれを弾き、歌をリードしなくてははいけません。どの礼拝であれ〔音楽は〕必要だからです。彼女は日曜学校では重要な存在です。クラスを教え、子どもたち全員を世話しています。もし欠席する子どもがいれば、その理由を調べます。新しい子どもたちが来れば、彼女は子どもたちを通じて彼らの家庭に入るように試みます。最初は社交として、それから、もしや神の御言葉を伝えられたらと。病人を訪ね、悲しみにある人を慰めます。女性の祈祷会や裁縫サークルも担当しますが、そこでは、学校で鍛えられた管理能力が全て必要になります。ですから、彼女は働きが多い誠実な家庭宣教師なのです。

当然のことですが、私は、学校に残っているバイブル・ウイメンたちの働き、またこの活動のために自ら志願した本科生の働きのほうにもっと精通しております。今年3月に卒業したクラスからは、5名の娘たちが特別聖書科を学校で履修しています。これに加え、ミセス・ザウグ、ミス・ハンセン、それに私のヘルパーたちがバイブル・ハウスにいます。3つの上級クラスの22名が、仙台や近隣の町での日曜学校を手伝うために志願しました。彼女たちは、家にいる多くの日曜学校教師たちに忍耐と誠実さのことを教えることが出来ましょう。いかに激しく雪が降ろうが雨が降ろうが、彼女たちは不平一つを言うこと無く、家に留まることなど考えません。彼女たちの多くは3マイルから5マイルも人力車に乗り、他の者は列車に乗るために非常に早く起床しなくてはならないのです。ある町で午前中に教え、午後には日曜学校が開かれる別の町に行くという者もいます。通常、彼女たちのクラス（に来るのは）、アメリカや日本において教えることが嬉しくなるような小ぎれいな身なりの子どもたちではなく、大体は汚れてぼろぼろ〔の者〕です。しばしば、彼らは泣きわめく赤ちゃんを背中にくくりつけており、教師たちが麗しい聖書の学びを教えようとしている時でも、「よしよしするjoggle」ために立ち上がらなくてはならないのです。

もちろん、毎年数名のバイブル・ウイメンが職を離れます—自分の家庭に入る人もいれ

⁶ 特別聖書科〔一年制聖書専攻科〕は、1900（明治33）年に一年制の聖書科が創設され、その後1916（大正5）年に聖書専攻科となった。

ば、[さらなる]教育のためという人もおり、もっと高給を受け取れる別の雇い口に行く人もいます。最後の要因についてはがっかりさせられるように見えますが、これも、他の少女たちが世俗の仕事を離れてバイブル・ウイメンとなってくれることにより、部分的には埋め合わされております。

東北学院の学生が文科を修了した場合、私たちは彼らが外に出て人々にキリストを教えるに十分な伝道者たり得るとは考えておりません。彼らは文科に在学している間じゅう聖書を学んで来たのですが、[なお]神学校において3年の特別な準備と学びを受けなくてはなりません。これらの伝道者の良きアシスタントとなるため、バイブル・ウイメンに開かれている幅広い職務をよく効果的に行うためには、彼女たちも本科で受ける学びだけでなく、聖書とキリスト教的活動についての特別なトレーニングを受ける必要があると、私たちは感じております。家庭における働きの需要が感じられるようになり、日曜学校、**Young Women's Christian Association** と執事の働きは訓練されたキリスト教女性を求めています。近い将来、私たちのミッションも、他のミッションがすでに持っているもの—私たちのバイブル・ウイメンが日本への御国の到来を早めるために良く備えられる学校—を持つことができるよう、希望しております。

謹んで提出いたします。

リディア・A・リンゼイ

仙台、日本、1908年6月19日

3

翌1909(明治42)年の報告は、リンゼイと親しかったハンセンが記している。冒頭に登場するバイブル・ウーマンたちとの最初の出会いの印象などは、公的な報告と言うよりも軽快な手紙という雰囲気があり、重厚なリンゼイの書き出しとはかなりトーンが異なる。ただし、この報告においても「ミッションが神学校を持っていない」ことのハンディがさり気なく言及されている。多くのバイブル・ウーマンの退職の理由は「普通の原因」であることわっていることは、決してスキャンダルからではないことを念押ししたかったためであろう。

REPORT OF BIBLE WOMEN'S WORK, JUNE 1908 - JUNE 1909.

MIYAGI GIRLS' SCHOOL.

Sendai, Japan, June 1, 1909.

To the Board of Commissioners for Foreign Missions,
Reformed Church in America.

The subject, "Bible-women", suggests one of the numerous surprises of the writer's first weeks in Japan. One day it was announced that the Bible-women connected with the school had come to pay their respects, and instead of the expected middle-aged or elderly women, there filed into the room a number of girls in school-girls' costume, none of them seeming over twenty years old, all of them shy but graceful, and some of them very pretty, with charming manners. These girls had just graduated from the school, and were beginning their year of post-graduate work, preparatory to being sent out to smaller towns as Bible-women, and it is such as they who comprise the great majority of the present force on our field. There are a very few widows working as Bible-women; but as the Mission has no Bible school, it must depend for workers almost entirely upon the graduates of the Girls' School.

The work of these young women is of necessity chiefly among the children and the young girls. They are certainly faithful in this. Even those still in the post-graduate course, who are giving most of their time to their studies, all help with at least onewomen's meeting a week, and attend two Sunday schools each Sunday, where they teach classes, and those who can, play the organ and lead the singing, not only for Sunday School, but also for church services. One of the objects of special effort during the past year has been an increase in their efficiency in these respects. In this effort the school has had able assistance from Mrs. W. G. Seiple, who is giving regular instruction in singing to the girls in the post-graduate course. One girl who has recently gone for work to a small town in the mountains, writes, "When I was in school, I was the poorest in music of all the girls; but the people here are very happy, because I can play hymns and teach them to sing."

A Japanese "old maid" being so rare as to be a negligible quantity, our youthful Bible-women cannot remain in the service for many years; a five or six years' term is the exception. However, many of them marry evangelists, and thus remain in the work permanently, while the others gain influence as Christian wives and mothers.

There have been a number of resignations during the past year, mostly for "the usual reason". These, however, have been more than balanced by the number of new girls entering the work. Perhaps the most gratifying feature has been the number of applicants for positions, who have been self-supporting during their school course. In the course of the year, out of thirteen applicants who had never been in the work before, eight had been self-supporting. This is an increase over the numbers of former years, which speaks well for the growing interest in Christian work among our educated young women.

Respectfully submitted,

(signed) KATE I. HANSEN.

バイブル・ウイメンの働きに関する報告 1908年6月－1909年6月

宮城女学校

仙台、日本、1909年6月1日

アメリカ合衆国改革派教会外国伝道局 理事会へ

この話題、「バイブル・ウイメン」は、筆者 [ハンセン] の日本での最初の数週間の中で体験した数限りない驚きの1つです。ある日、学校とつながりがあるバイブル・ウイメンたちが挨拶に来たと言われましたが、予想していたような中年または高齢の女性ではなく、女学生の装いをした娘たちが列になって部屋に入って来ました。20歳を超える者はおらず、皆恥ずかしがりですが上品であり、幾人かは大変可愛らしく、チャーミングな物腰です。これらの娘たちはちょうど学校を卒業したばかりで、小さな町へバイブル・ウイメンとして派遣される準備として、特別聖書科の学びを始めたところなのです。私たちの活動分野にあっては、彼女たちのような者が今ある働き人のうちの多数を占めます。バイブル・ウイメンとして働いている未亡人もごくわずかにいます。しかし、[私たちの] ミッションは聖書学校を持っていませんので、働き人としては女学校の卒業生に全く依り頼まなくてはいけないのです。

これらの若い女性たちの仕事は、主に子どもたちや若い少女たちの必要にあてられています。彼女たちは間違いなくこの [職務] に対して誠実です。卒業後コースにて、ほとんどの時間を勉強のために費やさなくてはならない者も、皆少なくとも1つの女性の集いを週1回は手伝い、毎週日曜に2つの日曜学校に参加してクラスを教えます。可能な人はオルガンを弾いて歌唱をリードします。それも日曜学校のためだけでなく、教会の礼拝のためにもです。昨年特に努めたことは、この点において彼女たちの能力を増やしたことです。そのために、学校は W・G・セイプル夫人の有能な助けを借りました。夫人は特別聖書科で歌唱の定期的指導を行っています。最近、山中にある小さな町に仕事に行った1人の娘は、このように書いています。「学校にいた時には、私は全ての女の子たちの中で音楽が一番できていませんでした。しかし、ここの人々は、私が讃美歌を歌えて彼らに歌うことを教えることができるので、とても喜んでくれています。」

日本では、「Old maid」は珍しく、ほとんどいません。[ですから] 私たちのバイブル・ウイメンもこの奉仕に長年とどまることはできません。5年か6年の任期は例外です。しかしながら、彼女たちの多くは伝道者と結婚しますので、それによってこの仕事に長期的に残ることになります。他の者も、クリスチャン妻や母として影響力を持ちます。

昨年は何件かの退職がありましたが、ほとんどは「普通の理由 (the usual reason)」からです。しかしながら、これは、新たにこの職務に就く娘たちによって埋め合わせされています。おそらく最も感謝すべきことは、在学時は自費生徒だった者でこの職への志願者が

多いことです。昨年度は、この仕事が未経験だった志願者 13 名のうち、8 名は自費生徒でした。過去の年々の志願者数よりも増加しており、教育を受けた若い女性たちの間でキリスト教的職務への関心が増していることを物語っております。

謹んで提出いたします。

ケイト・I・ハンセン

【謝辞】

本稿をまとめるにあたっては、訳語の選択などについて宮城学院資料室の佐藤亜紀氏から大きな助けを受けた。「ミセス・ランペ」「ミセス・クック」の身元その他について、東北学院史資料センター調査研究員の日野哲氏からも情報を頂いた。貴重な史料の複写することができたのは、ERHS 事務局長のアリソン・マリン氏の温かいご厚意による。2019 年夏の ERHS での調査は、宮城学院嶋田順好学院長のはからいによるものである。この場を借りて篤く御礼を申し上げたい。



□資料紹介

「現在校生徒中基督教信者名簿（明治三十九年十一月廿九日改訂）」
「明治三十九年九月一日以降洗禮受領者調」の紹介と若干の考察

資料室 佐藤 亜紀

はじめに

2019（令和元）年9月、宮城学院133回目の創立記念日をまもなく迎えようとしていた頃、資料室に本学院関係者から一通のメールが届いた。亡父の先妻にあたる方が宮城女学校出身で、在学時代もしくは卒業してからの記録等が残ってないか、という問い合わせであった。早速、関連資料がないかと倉庫を探したところ、たまたま手にしたものの中に本資料を発見した。その中には、問い合わせられた名前も記載されていた。本資料は、大きく二つの綴りに分かれていた。上に、中心となる10枚綴り「現在校生徒中基督教信者名簿（明治三十九年十一月廿九日改訂）」（以後、資料Aと呼ぶ）があり、その下に2枚綴り「明治三十九年九月一日以降洗禮受領者調」（以後、資料Bと呼ぶ）があった。さらに、この資料全体を見たところ、これまで他に紹介されたことのない資料であるように思われたので、今回、本年報で紹介することとした。

1 資料の翻刻（以下、52頁～69頁に掲載）

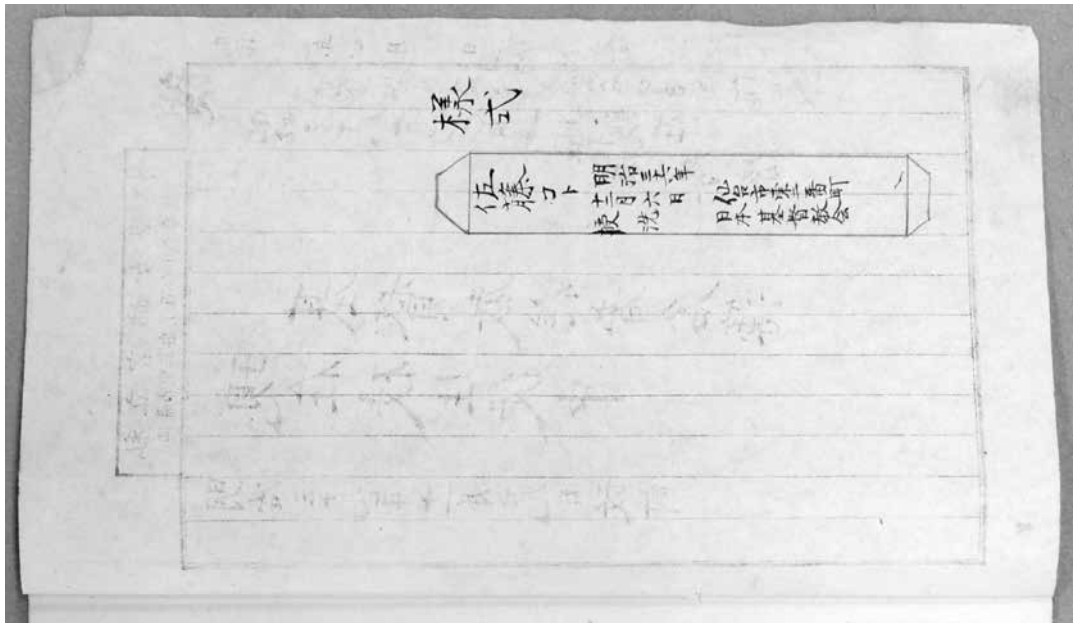
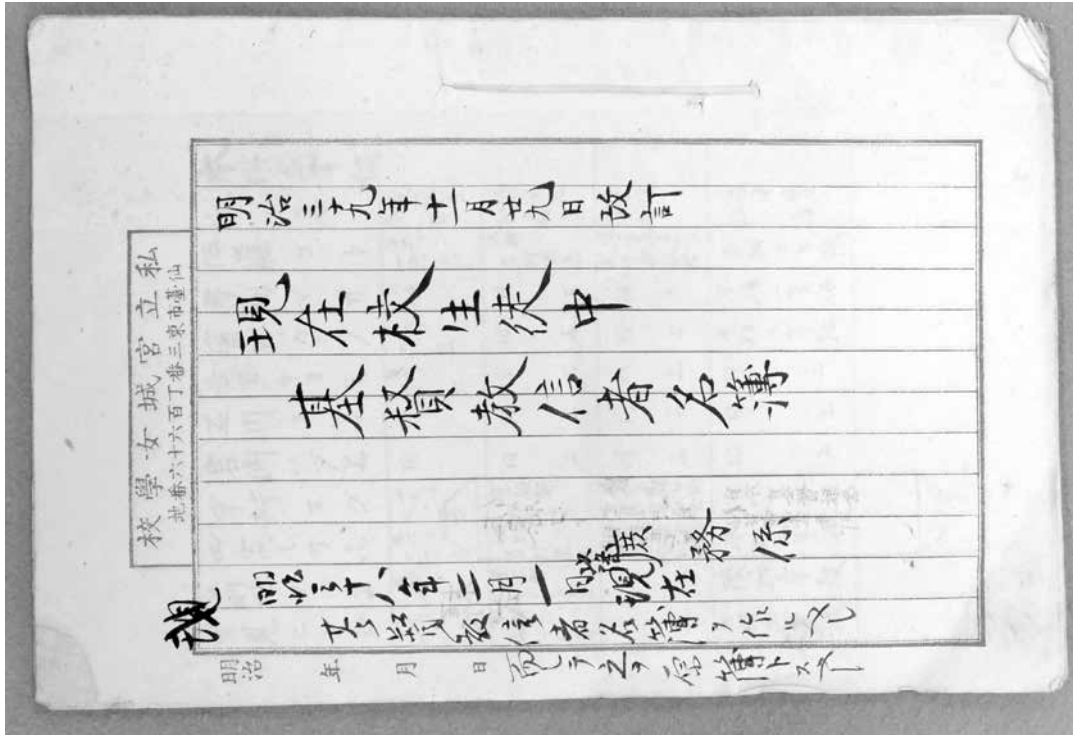
2 考察

1) 全体の様相

資料Aは、宮城女学校本科一年生から本科五年生までと、予科一年生から予科三年生までの、現学年、氏名、受洗年月日、授洗者氏名、受洗場所、受洗当時の学年が記載されている。また、資料Aの中にメモのようなものが二枚挟まれており、この資料が作成された1906（明治39）年11月29日以降の、12月1日と12月17日に追加記載されたことが書かれてある。

表紙袖に追記があるが、そこに記された「現在」がいつの時点のことかは不明である。おそらく明治39年11月29日以降であろう。「明治38年2月1日」という日付の意味も現在のところは不明とせざるを得ない。また、本資料を原簿として作成するよう指示されている「基督教信者名簿」も未発見である。

資料Bは、そのタイトルに明治39年9月1日以降と記されているが、実際には7月1日の記録から始められている。以下、10月7日、11月25日、12月16日に受洗した生徒の氏名、受洗場所、授洗者氏名が記載されている。さらに、この年12月中に分かった、本校生で仙台日本基督教会以外の他教会に於いて受洗した生徒氏名の記載もあった。



(表紙)

明治三十九年十一月廿九日改訂

現在校生徒中基督教信者名簿

庶務係

(追記)

明治三十八年二月一日以降現在

基督教信者名簿ヲ作ルベシ、而シテ之ヲ原簿トスベシ

(表紙裏)

様式

佐藤コト 明治三十六年 仙台市東二番町
十二月六日 日本基督教会
受洗

私立宮城女學校
 地址 東市三丁目六十六番地

氏名	月日	授受者	授受	授受者
佐藤 コト	三三六	教師 古村 吉吉	授受	授受者 飯伏 吉吉
岸田 マサ	三六一	同上	同上	同上
富田 シノブ	三三一	同上	同上	同上
吉田 キヨミ	三三六	同上	同上	同上
石川 コシ	四	同上	同上	同上
岩間 ハツ子	同	同上	同上	同上
中村 マサ	三三六	教師 古村 吉吉	授受	授受者 飯伏 吉吉
田舎 ミサキ	三三六	教師 古村 吉吉	授受	授受者 飯伏 吉吉
前田 マサ	三三三	教師 古村 吉吉	授受	授受者 飯伏 吉吉
里見 ヒトシ	三三五	教師 古村 吉吉	授受	授受者 飯伏 吉吉

明治 年 月 日

21.
A4

私立宮城女學校
 地址 東市三丁目六十六番地

氏名	月日	授受者	授受	授受者
早坂 シン	三三二	教師 古村 吉吉	授受	授受者 飯伏 吉吉
狩野 ソウ	三三六	教師 古村 吉吉	授受	授受者 飯伏 吉吉
千葉 コウラ	同	同上	同上	同上
滝井 マチ	三三一	教師 古村 吉吉	授受	授受者 飯伏 吉吉
横尾 ヒコ	三三六	同上	同上	同上
相沢 勲	三三一	同上	同上	同上
太田 トシ	三三一	同上	同上	同上
伊藤 幸子	同	同上	同上	同上
堀田 キン	三三五	同上	同上	同上
玉手 子	三三一	同上	同上	同上
畑 美芳	三三五	同上	同上	同上
橋本 マチ	三三七	同上	同上	同上

明治 年 月 日

(第二紙)

氏名	受洗年月日	授洗者氏名	受洗場所	受洗当時ノ級名
佐藤コト	三六ノ 一二六	牧師 吉村未吉	仙台市東一番丁日本基督教会	本科二年級
宇田マサ	三五ノ 六一	同上	同上	本科一年級
富田ウノ	三七ノ 一、三二	同上	同上	本科二年級
吉田キヨミ	三六ノ 一二六	同上	同上	同上
石川コン	同	同上	同上	同上
岩淵ハツエ	同	同上	同上	同上
中村マツ	一九ノ 七、一六	宣教師 グリング	埼玉県越谷町日本基督教会	
四倉ミサホ	三六ノ 一二六	牧師 吉村未吉	仙台市東一番丁日本基督教会	本科二年級
前田マツエ	三四ノ 六一	宣教師 デー・ビー・シユネーダ ^ス ー	同上	豫科三年級
里見ヒトシ	三九ノ 一一、二五	牧師 吉村未吉	同上	本科五年級

(第二紙)

早坂シン	三五ノ 一一二	宣教師 デー・ビー・シユネ ^ス ーダ ^ス	仙台市東一番丁日本基督教会	本科二年級
狩野ソノハ	三六ノ 一二六	牧師 吉村未吉	同上	同上
千葉マウラ				
菅井シゲノ	三七ノ 一、三二	牧師 吉村未吉	仙台市東一番丁日本基督教会	本科二年級
横尾ヒデ	三六ノ 一二六	同上	同上	同上
相沢勲	三九ノ 七、一	同上	同上	本科五年級
大田トミエ	三七ノ 一、三二	同上	同上	本科二年級
伊藤キミエ	同	同上	同上	同上
堀田キン	三九ノ 一一、二五	同上	同上	本科五年級
玉手テル	三七ノ 一、三二	同上	同上	本科二年級
畑 美芳	三九ノ 一一、二五	同上	同上	本科五年級
橋本ミサ	三八ノ 五、二七	同上	同上	本科三年級

A
*4

* A 4 : 本科四年生

A4

高橋トキヲ	三三六	口上	口上	本科四年級
田アノ	口
高橋シツ	口
高橋ニサ	口
奥山トキ	口

三本

私立宮城女學校
仙臺市三番丁六百六十一番地

早坂ノブ	三三六	教師	仙臺市	本科三年級
高橋イワ	三三六	古村木吉	仙臺市	本科四年級
平渡ツネ	三三六	本多橋一	仙臺市	本科四年級
尾花マサヲ	三三六	宮崎	仙臺市	本科四年級
早坂カツミ	同上	同上	同上	同上
氏家テイ	三三六	教師	仙臺市	本科四年級
住司キク	三三六	古村木吉	仙臺市	本科四年級
阿部ヒサ	三三六	同上	同上	本科二年級
阿部サト	同上	同上	同上	同上
北郷テル	三三六	教師	仙臺市	本科四年級
久光ミチヲ	三三六	仙臺市	仙臺市	本科一年級
古村イキ	三三六	古村木吉	仙臺市	本科一年級

明治 年 月 日

(第二紙裏)

A
*4

高橋トキヲ	三九ノ 二二二六	同上	同上	本科四年級
同 アサノ	同 "	"	"	"
斎藤シツ	同 "	"	"	"
岩本ヒサ	同	"	"	"
奥山マツエ	同	"	"	"

(第三紙)

*本三

早坂ノブ	三八ノ 四、三〇	牧師 吉村未吉	仙台市東二番丁日本基督教会	本科三年級
高橋イワ	三九ノ 二二二六	全 本多庸二	東京市赤坂青山学院教会	本科四年級 青山学院ニ於テ
平渡ツネ	三五ノ 一、二六	宣教師 デー・ビー・ シユネーダー	日本基督教会古川講義所	
尾花マサヲ	三五ノ 一、二六	同上	同上	
早坂カツミ	同上	同上	同上	
氏家テイ	三五ノ 九、二八	牧師 飯久保	弘前市美以教會	
荘司キク	三六ノ 二二六	牧師 吉村未吉	仙台市東二番丁日本基督教会	
阿部ヒサ	三八ノ 二二二六	同上	同上	本科二年級
阿部サド	同上	同上	同上	同上
北郷テル	三四ノ 八、一七	牧師 吉田亀太郎	日本基督教会平講義所	
久光ミサヲ	三八ノ 一、二五	牧師 高木熊次郎	仙台市廣瀬川	本科一年級
十二村イキ	三八ノ 三二二六	牧師 吉村未吉	仙台市東二番丁日本基督教会	本科一年級

* A 4 : 本科四年生
* * 本三 : 本科三年生

私立宮城女學校
仙臺市三番丁六百六十八番地

氏家トキ子	三九	同上	同上	同上	同上
池田ケン	三九	同上	同上	同上	本科三年級
岸波キク	三九	同上	同上	同上	同上
館岡マツ	三九	同上	同上	同上	本科一年級
阿部茂	三九	同上	同上	同上	本科二年級
岡少メ	三九	同上	同上	同上	本科二年級
岡本キヤ	三九	同上	同上	同上	本科一年級
田邊ヒサ	三九	同上	同上	同上	同上
小野アイコ	三九	同上	同上	同上	本科三年級
木村ヨシ	三九	同上	同上	同上	同上
東林ミサキ	三九	同上	同上	同上	本科三年級
岡田マツ	三九	同上	同上	同上	本科一年級

明治 年 月 日

16
私立宮城女學校
仙臺市三番丁六百六十八番地

伊藤オキ子	三九	同上	同上	同上	本科一年級
橋本秀尾	三九	同上	同上	同上	本科三年級
吉田藤枝	三九	同上	同上	同上	同上
及川ナホ子	三九	同上	同上	同上	本科二年級
登間ウン	三九	同上	同上	同上	同上
思沢フリス	三九	同上	同上	同上	本科二年級
山本ミサキ	三九	同上	同上	同上	同上
別所ツネ	三九	同上	同上	同上	本科二年級
美沼シゲヨ	三九	同上	同上	同上	本科二年級
堀越カウ	三九	同上	同上	同上	本科三年級
成田サヲ	三九	同上	同上	同上	本科一年級
大石フミ	三九	同上	同上	同上	本科三年級

明治 年 月 日

(第四紙)

氏家トキヨ	同上	同上	同上	同上
池田チン	三九ノ 一一、二五	同上	同上	本科三年級
岸波キク	同上	同上	同上	同上
徳岡マツ	三八ノ 三二六	同上	同上	本科一年級
阿部茂	三九ノ 一一、二五	同上	同上	本科三年級
岡 ウメ	三九ノ 二二五	同上	同上	本科二年級
岡本チヤ	三八ノ 二二六	同上	同上	本科一年級
田邊ヒサ	三八ノ 三二六	同上	同上	同上
小野アイロ	三九ノ 一一、二五	同上	同上	本科三年級
木村ヨシ	三八ノ 三	西洋宣教師	秋田県大館町美以教会	
東海林ミサホ	三九ノ 一一、二五	牧師 吉村末吉	仙台市東二番丁日本基督教会	本科三年級
岡田テツ	三八ノ 二二六	同上	同上	本科一年級

(第五紙)

本二
*

伊藤オキミ	三七ノ 五六	牧師 吉村末吉	仙台市東二番丁日本基督教会	本科一年級
橋本秀尾	三六ノ 一二六	同上	同上	予科三年級
吉田藤枝	三六ノ 二二(旧十五)	宣教師 梶原長八郎	若松市馬場口日本基督教会	
及川ナホコ	三九ノ 一〇七	牧師 吉村末吉	仙臺市廣七川	本科二年級
菅間ウン	三七ノ 五六	全上	仙台市東二番丁日本基督教会	
黒沢フクス	三九ノ 三四	宣教師 フラスト	東六番丁日本基督教会	本科二年級
山本ミサホ	三四ノ 一、一九	米國宣教師 フライ	仙台市名掛丁仙臺クリスチャ ン教会	
別所ツネ	三七ノ 一二二七	牧師 落合吉之助	仙台市定禪寺通り仙台聖公會	
養沼シゲヨ	三九ノ 三四	宣教師 フラスト	東六番丁日本基督教会	本科二年級
堀越カウ	三九ノ 三四	宣教師 フラスト	東六番丁日本基督教会	本科二年級
成田サワ	三八ノ 二二六	牧師 吉村末吉	仙台市東二番丁日本基督教会	本科一年級
大石フミ	三九ノ 四、一五	牧師 海老名弾正	東三番丁組合教会	本科二年級

*本二：本科二年生

明治 年 月 日

A₂

大泥カメヨ	口	口	口	口	佐々木千吉 三九 牧師 寺澤仙治 立村本寺 四本堂 豫科三年級

明治 年 月 日

B₁

三品ハギノ	三九	二九	二九	二九	酒屋 牧師 寺澤仙治 子不之博 協成會
亀井コト	三九	三五	三五	三五	牧師 寺澤仙治 立村本寺 四本堂 豫科三年級
私本ミドリ	三九	三五	三五	三五	牧師 寺澤仙治 立村本寺 四本堂 豫科三年級
猪股シノ	三九	三五	三五	三五	牧師 寺澤仙治 立村本寺 四本堂 豫科三年級
作間ケイ	三九	七一	七一	七一	牧師 寺澤仙治 立村本寺 四本堂 豫科三年級
菅野マツヨ					聖教 会
喜岡村 美志					子澤 聖教 会
及川勝子	三九	二一	二一	二一	牧師 寺澤仙治 立村本寺 四本堂 豫科三年級
喜多村 操	三九	二一	二一	二一	牧師 寺澤仙治 立村本寺 四本堂 豫科三年級

明治 年 月 日

(第五紙裏)

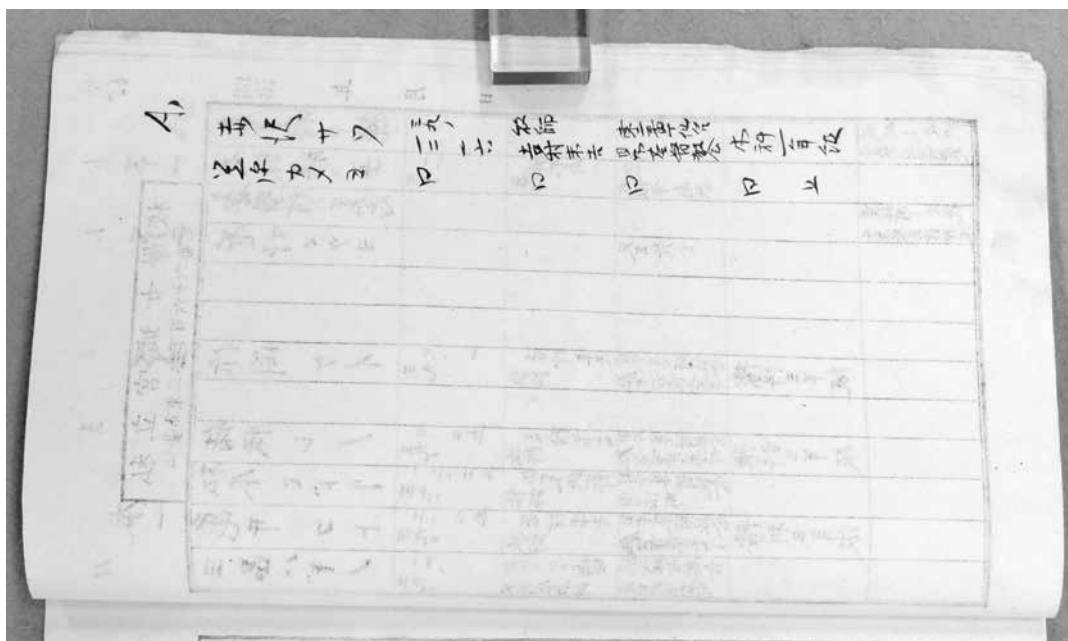
A *2	佐々木チヨシ	三九ノ 一二二六	牧師 吉村未吉	東一番丁 仙台日本基督教会	本科二年級
	大沼カネヨ	同	同	同	同

*A? : 本科二年生

(第六紙)

本一	三品ハギノ	二九ノ 一一、	米国宣教師 レスト博士 デフオ	遠田郡涌谷町涌谷組合教会	
* 本一	亀井コト	三九ノ 二二五	牧師 吉村未吉	仙台市東一番丁日本基督教会	豫科三年級
	松本シドリ	三七ノ 一二二五	牧師 佐々木純一郎	岩沼町日本基督教会	
	猪股シノ	三九ノ 二二五	牧師 吉村未吉	仙台市東一番丁日本基督教会	豫科三年級
予三	作間ケイ	三九ノ 七、一	牧師 吉村未吉	仙台市東一番丁日本基督教会	豫科三年級
予二	菅野マツヨ			天主教会	
	喜多村美志				千葉県君津郡木更津町ニテ受洗
* 予一	及川勝子	三二、二一	牧師 鈴木寿一	大坂市南教会	
	喜多村操				千葉県山武郡大網町ニテ受洗

*本一 : 本科二年生
*予三 : 予科三年生
予二 : 予科二年生
予一 : 予科一年生



資料 A 終り

(第六紙裏)

A
*1

赤次サワ	三九ノ 一二二六	牧師 吉村未吉	東一番丁仙台日本基督教会	本科一年級
笠原カメヨ	同	同	同	同上

* A! : 本科二年生

左記人名昨廿五日幸町通
 本基督教會名譽牧師
 村末吉氏より洗礼受給
 (父)
 本學生 里見ヒトシ
 同 同 堀田キコ
 同 同 堀田美芳
 同 同 堀田千二
 同 同 阿部茂
 同 同 小野子白
 同 同 東海林三栄
 明治三十九年十一月廿一日

表而之通、基督教信者
 名簿に記載、
 明治三十九年十一月一日
 廣務係

(以下空白)

左記八名昨廿五日、南町通日
本基督教会ニ於テ、牧師吉
村末吉氏ヨリ洗礼ヲ受ケ
タリ

本科五年生 里見ヒトシ
同 堀田キン
同 畑 美芳
本科三年生 池田チン
同 岸波キク
同 阿部 茂
同 小野アイコ
同 東海林ミサホ

明治三十九年十一月廿六日

(裏面)

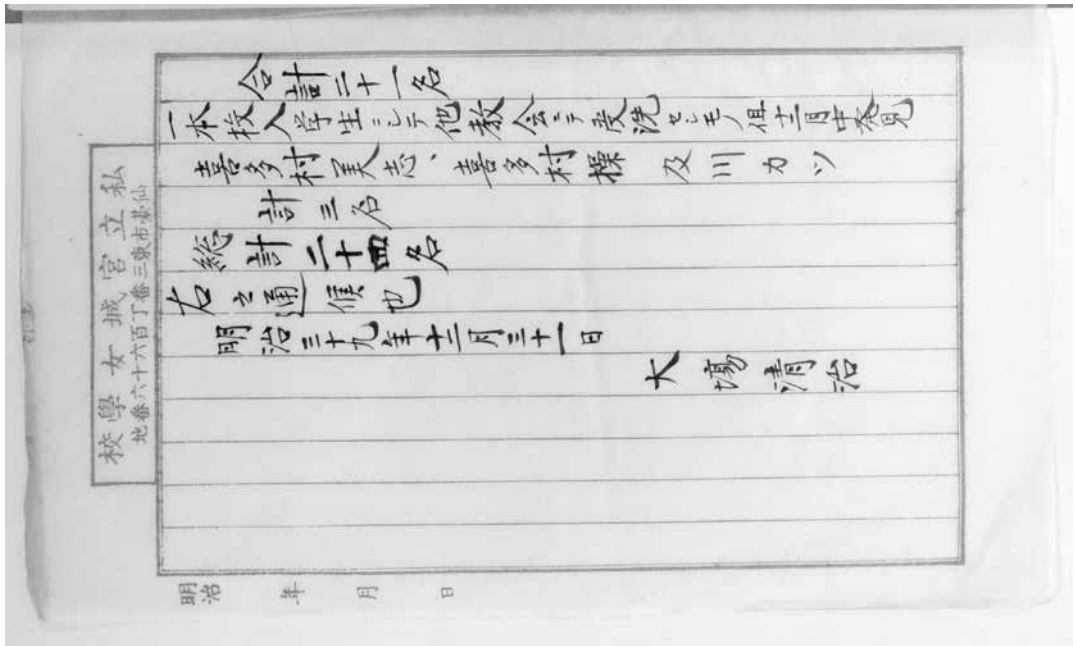
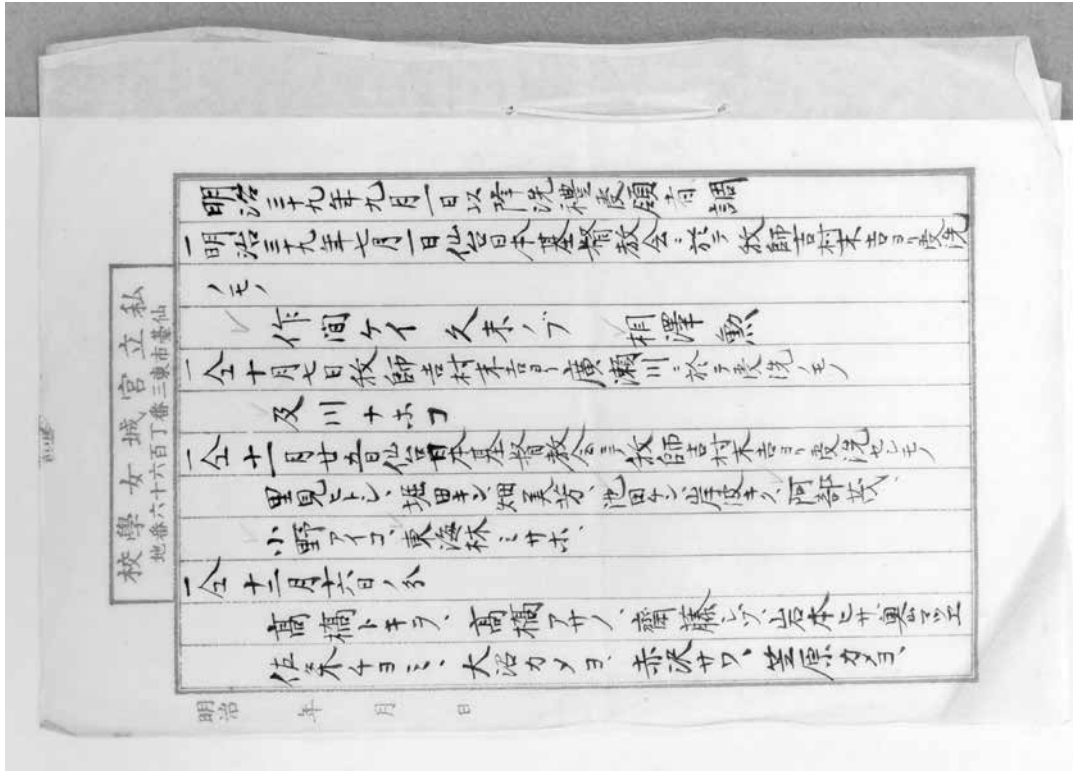
表面之通り、基督教信者
名簿ニ記載セリ

明治三十九年十二月一日
庶務係(丸印あり「大場」カ)

教員 京道信次郎
本科四年生 高橋トキヲ
全 全 アサノ
全 齊藤シヅ
全 岩本ヒサ
全 奥山マツエ
本科二年生 佐々木チヨシ
全 大沼カメヨ
本科一年生 赤沢サヲ
全 筈原カメヨ

右十名、明^{マツ}十六日、南町通日
本基督教会ニ於テ、同教会
牧師吉村末吉氏ヨリ洗礼
ヲ受領セラレタリ

明治三十九年十二月十七日



明治三十九年九月一日以降洗禮受領者調

一 明治三十九年七月一日、仙台日本基督教会ニ於テ、牧師吉村末吉ヨリ受洗ノモノ
作間ケイ 久末ノブ 相澤勲

一 全十月七日、牧師吉村末吉ヨリ、廣瀬川ニ於テ受洗ノモノ
及川ヲホコ

一 全十一月廿五日、仙台日本基督教会ニテ、牧師吉村末吉ヨリ受洗セシモノ
里見ヒトシ、堀田キン、畑美芳、池田チシ、岸波キク、阿部茂、小野アイコ、東海林
ミサホ

一 全十二月十六日ノ分
高橋トキヲ、高橋アサノ、齋藤シヅ、岩本ヒサ、奥山マツエ、佐々木チヨミ、大沼カメヨ、
赤沢サワ、笠原カメヨ

合計二十一名

一 本校入学生ニシテ他教会ニテ受洗セシモノ、但十二月中発見
喜多村美志、喜多村操 及川カツ

計三名

総計二十四名

右之通候也

明治三十九年十二月三十一日

大場 清治

2) 資料 A の分析結果

資料 A から読み取れることとして、学年が上がるごとに受洗者が増加していることがわかる。資料 A をもとに、1906（明治 39）年の基督教徒信者数と当時の在籍生徒数（「明治 39 年 6 月 30 日現在生徒調」¹⁾ 参考）を表 1 に示した。学年ごとの受洗者数を比較してみると、卒業学年の本科五年生では、全員がクリスチャンとなっている。さらに、在籍クリスチャンの生徒中、入学後に受洗した生徒は、75%（76 人中 57 人）であった。

次に、受洗教会及び授洗者に着目すると、生徒の 67%（76 人中 51 人）が東二番丁（現仙台東一番丁）教会で吉村末吉牧師によって洗礼を受けられていた。吉村末吉牧師は、仙台神学校（現東北学院）を卒業し、仙台東一番丁教会第七代牧師である。彼は、宮城女学校第一回卒業生である宮本むら²⁾ と結婚し、二人の男の子に恵まれた。しかし、むらは 1902（明治 35）年、三十歳の若さで天に召されたのである。その他、A.D. グリング、吉田亀太郎、A.K. ファウスト（後の宮城女学校第六代校長）、D.B. シュネーダー（東北学院第二代学院長）など、宮城女学校と関わりの深い宣教師によって洗礼を受けられていた。注目されたのは、海老名弾正から洗礼を受けられた生徒が、東三番丁組合（現仙台北）教会で一人いたことだ。『日本キリスト教団仙台北教会 120 年史』³⁾ 23 頁に、「1891（明治 24）年 5 月、海老名弾正を迎えての伝道集会、1892（明治 25）年 12 月、海老名弾正来仙し説教」の記載があった。宮城女学校の生徒が洗礼を受けられた 1906（明治 39）年の海老名の来仙の記載はなかったが、本資料から明治 39 年にも海老名弾正が来仙し、布教活動を行った可能性があると言える。

表 1 宮城女学校における基督教徒信者数と在籍生徒数(明治 39 年)

	学年	基督教徒 信者数 (人)	在籍 生徒数 (人)
本科	5 年	21	21
	4 年	16	18
	3 年	16	34
	2 年	13	43
	1 年	5	46
小計		71	162

	学年	基督教徒 信者数 (人)	在籍 生徒数 (人)
予科	3 年	1	19
	2 年	2	11
	1 年	2	6
小計		5	36

「明治 39 年 6 月 30 日現在生徒調」より筆者作成

¹⁾ 「明治 39 年 6 月 30 日現在生徒調」（宮城学院資料室所蔵）は、生徒 198 名の氏名、成績の合計点、平均点を記載している。

²⁾ 宮本むらについて書かれた書物『O MURA SAN』は、『本年報第 21 号』（2016 年 3 月、50 頁－84 頁）に紹介されている。

³⁾ 日本基督教団仙台北教会 2010 年 3 月発行。海老名弾正が来仙した当時の牧師は、三宅荒毅。1906 年は、片桐清治第 2 代牧師。

さらに本科五年生について、21人中13人が1903(明治36-37)年度、すなわち本科二年生の時に受洗していることに注目したい。本科五年生が入学する1902(明治35)年は、3月に木造校舎が全焼し、片平丁にある日本人家屋を借りて学校生活を送るいわゆる「片平丁仮校舎時代」にあたる。彼女たちは、片平丁仮校舎で学校生活を始めた。そして翌年、本科二年生になった1903年に新しい寄宿舎が完成し、二階を寄宿舎、一階を校舎として9月に授業が再開された。そして、1904(明治37)年、彼女たちが本科三年生になった年に新校舎(第一校舎)が献堂された。

本資料に見える本科五年生が宮城女学校で過ごした五年間は、火災で校舎全焼という予期せぬ不幸に見舞われた直後から始まったが、ゾーフル校長を始め、ワイドナーやパーウエルという婦人宣教師たちが日本人教職員と力を合わせ、新寄宿舎・新校舎献堂に向け、宮城女学校の益々の発展という明るい未来のために一丸となって困難に立ち向かっていった時期であった。その努力が、1903(明治36)年3月、97人の在籍生徒中32名がクリスチャンに導かれるという数字に表れているのではないだろうか。

3) 寄宿舎の役割

宮城女学校に入学する生徒達は、キリスト教主義学校だからという理由で入学する生徒もいれば、キリスト教に全く接することがなく入学した生徒ももちろんいたことであろう。

では、なぜ資料Aに見える「在籍クリスチャンの生徒中、入学後に受洗した生徒が、75%(76人中57人)」、「卒業時まで全員がクリスチャンになる」という結果が生み出されたのであろうか。この高いクリスチャン化率の理由はどこにあるのだろうか。その理由を探るヒントが、『宮城女学校五十年史』(1936(昭和11)年12月発行)に収められた卒業生の回顧録にあると思われる。

①第8回卒業生・後に宮城女学校教員 原田ことちの文より抜粋(原文通り、ただし、人名を除いて旧字体は新字体に改めた)

校長のゾーフル先生は実に愛の化身とでも言ひたい方で、お小遣ひが来ないで困つて方には何かわざと用をさせてお金をあげたり、学費を出してあげたりなさいました。私共が風邪でも引かうものならスプーンで私共の舌を押さへてノドへお薬をつけて甘草とかいふあまつたるい匂ひの煎薬をこしらへて持つて来て下さつたり、蜂蜜を持つていらして熱湯にといて御自分が先にスプーンでお舐めになつてから、其のまま下さるのには誰も閉口しました。併し先生はこれ程私共を愛して下さつたのです。・・・宗教方面はまだ日本に女子青年会のない頃でしたが、礼拝は朝はゾーフル校長、三時には幹事の佐伯先生、夜六時の寄宿生のためには校長以外の西洋の先生と寄宿にお出での訳の先生と御二人が司会でした。朝は英語、午後は邦語、夜は邦語・英語両方でした。お陰で主の祈りも校長

の祈りも意味は分らずと英語で覚えてしまひ、真似をしたりしました。水曜日には三時から生徒の司会でお祈会をしました。日曜の午前には校長と舎監の浅井先生に引率せられて教会に行き、午後は上級生は日曜学校を教へに出かけ、下級生は校長先生や訳の先生の組に分れて日曜学校がありました。女中や小使ひさんは浅井先生の組でした。夜七時から校長先生のお宅で西洋の先生が代り代りに当番でヘルパーの方が通訳でお話があり此時だけ一週に一度だけピアノに合わせて英語の讚美歌を唱ふのでした。

②第 19 回卒業生 岡田佐知子の文より抜粋（原文通り、ただし、旧字体は新字体に改めた）

日曜日は四・五年の上級生で、あちらこちらへ伝道にゆかれる人々を除くその他の寄宿生は全部先生に引率されて南町の教会へゆきました。午後からは室内で黙禱をしたり、聖書を読んだり、又はお天気の良い日など裏庭の井戸端の傍の青々とした絨毯を敷きつめた様な芝草やクローバの上で、お友達と将来の希望や未来の事や魂の有無についてなど種々議論をし合つたりしたものでした。上級生になつてから、学校の前の人力車や汽車に乗つて、あちこち伝道に行くのも又楽しい事の一つでした。

③第 23 回卒業生 大場慰子の文より抜粋（原文通り、ただし、旧字体は新字体に改めた）

寄宿舎では日曜日の夜の礼拝は、今も校門の左方に残つて居る西洋館の客間で、夜七時から行はれる事になつて居ました。その礼拝の時は必ず小さい予科生の私共が、英語の讚美歌を寄宿舎から運んで行つたり、持ちかへつたりするのが役目でした。……ミス、ワイドナーといふ方が校長になられたのでございます。先生は私共にピューリタン式な信仰、ピューリタン式な生活又は学問を授けて下さつた様な気がいたします。……日曜日の午後のサイレントアワーの時はそれこそ静肅にして聖書でも読んで居りませんでしたら、そつと音をたてずに各室をお巡りになつて御目玉を頂く様な事が度々でございました。この様な厳格そのものの様な硬教育をして下さいましたが、その反面、寄宿舎で誰かが病気でございましたと、御自身でヒマシ油を持つていらして、よく病人の面倒を見て下さるといふ温和な方面も多分にお持ちでございました。

当時の寄宿生たちは実に多くの時間を礼拝や聖書・讚美歌に費やし、キリスト教的な生活に根差して日々を過ごしていたことがわかる。また日曜日となれば、宣教師とともに教会へ行き、日曜学校で奉仕活動や伝道活動などを行う。まさにキリスト教主義女子教育が日常生活を通して行われていたのである。婦人宣教師も、ただ厳格なだけでなく、病気の時は親身になって看病したり生徒たちを心から愛しんでいたことが感じ取れる。

1895（明治 28）年、ズーフル校長が外国伝道局へ送った報告書によれば、当時の生徒

数は55名で、内42名が寄宿生であった。中年の日本人クリスチャン婦人が専任舎監として寄宿生と生活をともにし、生活指導の任に当たっている。生徒たちは、日曜日の教会の礼拝が終わった後、仙台市内各所で開かれる日曜学校に出向き、伝道に協力している。日曜学校の応援に出向かない残りの生徒たちのためには、同じ時間に校舎内で日曜学校が開かれていた。毎晩校舎内で開かれる祈祷会が、日曜日の夜だけは婦人宣教師館で開かれた。この年は、55名の生徒中、30名がクリスチャンであり、未信者の家庭で育ち宮城女学校に入学した生徒が、数年経ち信仰を言いあらわすようになることは非常に喜ばしいと報告されているのである（『天にみ栄え』297頁）。

このような日々の生活を通して、キリスト教に接したことの無い生徒も、宮城女学校でのキリスト教主義女子教育の中で、75%の生徒が在学中に教会で受洗し、卒業時までにはクラス全員がクリスチャンになったのである。それは決して特別のことではなく、言わば当たり前のような感覚でそうなったのではなかったろうか。十代の多感な少女たちは寄宿舎で生活を共にし、友人と語らう中で、婦人宣教師と共に伝道活動に向かう上級生たちに自分もあのようになりたいと憧れを抱き、受洗したのかもしれない。

1902（明治35）年5月、「合衆国改革派教会」総会が開催された。外国伝道局総幹事バーソロミューは、「宮城女学校は卒業生がクリスチャン婦人となり、あるいは婦人伝道者となることを目的としている学校である」と述べ、教会員による尊い献金で建てられた最初の本造校舎が火災で全焼し、仮校舎で不憫な生活を送っている状況を報告して、新寄宿舎・新校舎献堂に向けて献金のお願いを述べている（『天にみ栄え』353頁-354頁）。その、再建の第一号が「寄宿舎」だった。

これらのことから、宮城女学校における「寄宿舎」は、単に遠方の生徒たちの生活場所を確保するという場だけではなく、前述のように伝道活動の主要な場になっていたことがわかる。婦人宣教師との寄宿舎での福音に基づく人格的交わりの日々を通して、生徒たちに、キリスト教の精神を涵養させる最も重要な場であったと言えよう。今回発表した資料の一端からも、当時の寄宿舎が、宮城女学校に与えられた使命を果たす一役を担っていたことがわかった。今後の課題として、さらに寄宿生の詳細について書かれた資料を発見していくことが、当時の宮城女学校のキリスト教育を知る手掛かりとなるであろう。

おわりに

この名簿が作成された真の理由は明らかではないが、おそらく外国伝道局に報告するために、調べたものと推測される。今のところ、1906（明治39）年分しか見つけることは出来ていない。日本基督教団の教会ごとに発行されている記念誌等で受洗年月日や受洗者氏名の記録を見たことはあるが、学校単位で生徒の受洗記録を調べ名簿にし、更に洗礼を授けた人・場所・洗礼を受けた年月日・学年までを記録に残しているのは非常に珍しいのではないだろうか。この資料は、初めて手にした時の思い以上に貴重な資料なのではないだろうか。

かと考えるに至った。

資料 A、資料 B を紹介するにあたり、生徒の名前、受洗記録等は個人的な情報に属するものであり、匿名扱いにすべきか悩んだ。しかし、この資料は、創立期の宮城女学校の、ミッションスクールとしての活動実態を研究する基礎資料となるものであり、今後研究を深化させるために、必要な歴史情報になると考えた。そこで宮城県公文書館の公文書利用制限を見てみると、信徒名簿等の宗教・思想に関わる資料の利用制限は「80年」であった。この資料が作成されてからすでに114年経過しており、宮城県公文書館の基準に倣い、本資料全文を掲載することとした。そのことを最後に記しておく。



宮城学院の植物たち その2 —野生ラン—

宮城学院女子大学 生活環境科学研究所
ミツバチ科学研究部門助教 藤原 愛弓
宮城学院女子大学 一般教育部教授 木村 春美

「宮城学院の植物たち」のシリーズ第2回は、自然科学の専門家とのコラボ企画として、宮城学院敷地内に生育する希少で可憐な野生ランを紹介し、また不思議で魅力的なランの世界の一端を解説します。専門家は、寄附講座として生活環境科学研究所内に設立された「ミツバチ科学研究部門」所属の藤原で、学内でミツバチを飼育するとともに、ミツバチやその生産物についての研究を行っています。また、宮城学院敷地内や水の森地域の自然環境や生息生物についても研究し、その成果を教育に活かすことも重要な仕事と位置づけています。共著者木村とは遊歩道仲間で、そこからこの企画が生まれました。

1. ランと人との関わり

ランの仲間は世界に2万5000種以上も存在するとされており、非常に多様化し繁栄している植物群です。ランの花と聞くと、お祝い事などで贈られる豪華絢爛な花をイメージされる方も多いのではないのでしょうか。有名なものの一つは胡蝶蘭（コチョウラン）と呼ばれるもので、花言葉にも「幸福が舞いおる」があることから、祝い事の際に贈り物として飾られることも多いようです。

今でこそ大きく立派な花を咲かせるコチョウランですが、実はもともとの原種は東南アジアに自生する、現在よりも小型の野生のランでした。人の手により品種改良が繰り返されたことで、今のように花も大きく、白系、ピンク系、黄色系などの様々な色や形を持つ多様な品種が生まれたのです。このように、私たちがよく見るランは、人の手で栽培され育成されてきた種も多いのですが、一方で、日本にも野生のランが生息することをご存じでしょうか。野に咲くランには、それぞれの種に特有の生態があり、その可憐で繊細な花の美しさに魅了される愛好家が多くいます。ランの花は正面から見てみると左右が対称になっているため、これらの特徴を心にとどめながら注意深く観察すれば、宮城学院の中でひっそりと可憐に咲く野生ランの花を見つけることができるかもしれません。

園芸種としても知られるランの仲間、遊歩道にも生息している野生ランに春蘭（シュンラン）があります。名前からも、春に咲くランの代表的存在であることが分かりますが、遊歩道脇の斜面数カ所、3月から4月に花を咲かせています（写真1）。日光の差し込む乾燥気味の落葉広葉樹林を好むようです。ホクロ、ホックリ、ジジババ、ジィサンバァサン、ハクリバーサなど様々な呼び名で呼ばれ、昔は山野のあちこちに見られました。しかも、春蘭はかつて食卓に上る山菜でもあったようで、桜の花の塩漬け同様、塩漬けした春

蘭の花にお湯を注ぎお茶にして飲んだり（蘭茶）、生
の花を天ぷらにしたり、茹でて酢の物やお浸しにする
など親しまれていました。さらに、薬草としても利用
され、地下茎はヒビヤアカギレの軟膏を作るのに使わ
れたようです。このように、春蘭は私たちの生活に密
着した身近な野草だったのです。春蘭をモチーフにし
た塗りのお盆や食器、調度品が多いのも首肯けます。



写真1 遊歩道に咲くシュンラン
2020年4月21日撮影

2. 宮城学院に咲く野生ランの仲間たち

宮城学院のキャンパスでは、早春～夏にかけて、シ
ュンランを含め何種類かの野生のランが構内の森の
あちらこちらで開花します。ここでは、2種類の珍し
い野生ランを紹介します。実はどちらもとても小さい花を咲かせ、私たちのランのイメー
ジとは大きく異なります。

まず、宮城県の絶滅の危機に瀕する生物をまとめた、宮城県版のレッドデータブックで
絶滅危惧Ⅱ類（VU）に分類されている、榧蘭（カヤラン）という多年生の着生ランです。
着生の文字通り、樹木の幹や枝に気根でからみつきつつ育ちます。絶滅危惧Ⅱ類に指定さ
れるということは、「宮城県において絶滅の危険が増大している種」であることを意味し
ており、宮城県の中でも限られた場所ではしかその姿を確認

することができません。今年5月
～6月にかけて、宮城学院の構
内を調査したところ、何か所か
に生育する大木の枝で、可憐な
花を見つけることができました
（写真2）。黄色く小さい花
が多数つき、緑の葉とのコント
ラストが相まってとても美し
い花です。



写真2 遊歩道の大木に付着して咲くカヤラン
2020年5月11日撮影

しかし、カヤランは強風などにより、本来の生育場所である木の枝が強風で折れて枝と
一緒に落下してしまうことがあります。今年も野外調査の折、そのようなカヤランが多数
見受けられ、宮城学院の遊歩道で発見しただけで100個体以上が樹上から地面へと落下し
てしまっていました。その中には、もう間もなく花が咲くはずだった蕾をつけた個体もた
くさんありました（写真3a）。しかしカヤランの存在を知らずに通りかかれば、道に木の
枝が落ちているようにしか見えません（写真3b）。「このままでは林道やその周囲に落下

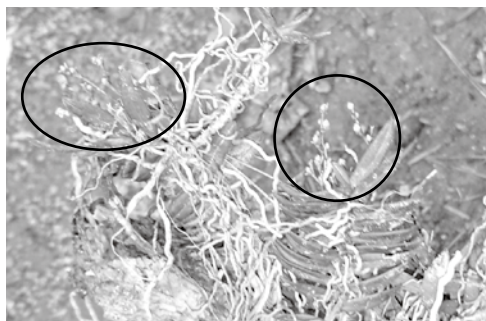


写真 3a) 樹上から落下したたくさんの蕾のついたカヤラン

2020年4月23日撮影



3b) 遊歩道に落下したカヤランが5個体以上付着した木の枝

2020年4月23日撮影

した多くのカヤランは、踏まれたり乾燥したりして花を咲かせることができない可能性が高い。せめて、いまある蕾だけでも咲いてくれれば」と、湿り気の多い林内に落下したカヤランを、付着した枝ごとできる限り集めてきてそっと置いてみました。そして、数日おきに観察を続けたところ、18日後、蕾のいくつかが大きくなり無事に花を咲かせているのを確認できました。この生育可能な環境がかなりデリケートで、貴重な野生ランを守るためにはどうすればよいか、少なくとも宮城学院に生育するカヤランの命をなんとか継続させることができないか、現在その方法を模索しています。

もう一種類は祐舜蘭（ユウシュンラン）です。こちらは、環境省版のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類（VU）、宮城県版のレッドデータブックで準絶滅危惧（NT、存在基盤が脆弱な種）に指定されている希少なランの仲間です。カヤランと同じく5月頃に、宮学の林内や林縁で白くて小さい可憐な花を咲かせます（写真4）。このランは面白いことに、葉が小さく退化しており、植物が通常行う光合成機能が失われつつある代わりに、必要な栄養の多くを、植物体内にいる共生菌から得ていると考えられています。このように一口にランの仲間といっても、花の美しさもさることながら、その生態は多様で興味が尽きません。



写真 4 遊歩道縁にひっそりと咲くユウシュンランの花
2020年5月3日撮影

3. ランの花の不思議な生態

そもそもランの花は、他の植物の花とは少し異なった特徴を持っています。花の中心から垂れ下がる唇弁（しんべん）と呼ばれる部分は、虫たちが花粉を運ぶ際に着地しやすいように、花びらから進化したものです。まるで虫たちに「さあいらっしやい」と呼びかけているようにも見えます。それは、ランの持つ独特の繁殖戦略なのですが、ここでは不思議な戦略を持つランとして、ミツバチとも深い関わりのある金稜辺（キンリョウヘン）をご紹介します。

キンリョウヘンは中国を原産とする東洋ランの一種であり、花は一般的に茶色～黄緑色で、一見小さく地味に見えるものの、実は特別な能力を隠し持っています。このランは、日本の在来種のミツバチであるニホンミツバチ（ミツバチ科学研究部門でも飼育中）が、巣の仲間を呼び集めるために出す「集合フェロモン」と共通した香り物質を分泌することができます。つまり、ミツバチたちを“だまして”集合させ、受粉の仲立ちをさせるのです。もともとミツバチが植物の花を訪れる目的は、花が分泌する花蜜と花粉を採集し、子育てなど群れの維持や成長等に用いることです。一方で植物の側は、花蜜と花粉をミツバチに提供する代わりに、花粉の運び手であるミツバチに花の受粉を担ってもらうことを目的としており、両者はいわゆる Win-Win の関係性（両方に利益がある相利共生）であるとされています。

ところが、このキンリョウヘンは、ミツバチに蜜と花粉を与えません。このランの花の上部には、通常の花粉とは形態の異なる、「花粉塊（かふんかい）」というものが蓋をされた状態で収まっています。この花粉塊には糊のようにミツバチの体に付着可能な部位があり、ランの花の香りの出どころを追って花にもぐったミツバチの背中に、この花粉塊がびったりとくっついてしまいます（写真 5a）。その結果、呼び寄せられて集合したミツバチ達が動き回っているうちに、ランの花粉塊を花から花へ運び、受粉が成立するのです。

ニホンミツバチの飼育者にとっても、このキンリョウヘンとニホンミツバチの関係が役立ちます。春、ニホンミツバチの巣別れした群れ（分封群）を捕獲する際に、このランを空の巣箱の前に置いておくと、新しい巣を探している偵察蜂が、キンリョウヘンの花の香りに引き寄せられて飛んでくるため、群れを捕獲できる可能性が上がるのです。偵察蜂がこの巣箱を気に入れば、自分の巣に帰ってこの巣箱の位置情報を伝えるダンスを踊り、さらにこの巣箱を見に来る蜂が増えていきます。この巣箱を気に入った偵察蜂が多ければ、最終的には数千～1万匹近いミツバチ達が元巣から飛んできて、いったんキンリョウヘンに集合した後、巣箱の中に入り込んでいきます（写真 5b）。ニホンミツバチの誘因に用いる際、キンリョウヘンが受粉して花が終わってしまうと、ミツバチを呼び寄せる効果がなくなってしまうため、ミツバチが花に潜り込まないように目の細かいネットをかぶせます（写真 5b）。このようにランは花の美しさで人を魅了するだけではなく、生活の様々なシーンで役立っているのです。



写真 5a) 背中にランの仲間の花粉塊をつけたミツバチ (矢印は花粉塊を示す)
 ※本写真はキンリョウヘンの花粉塊ではない
 2020年5月16日撮影



写真 5b) 香りに誘引されてキンリョウヘンの花に群がるニホンミツバチ
 その後左側に設置した巣箱に移動した
 2014年6月2日撮影

4. 未来のために

特に野生のランの仲間は、環境改変による生育地の減少にくわえ、愛好家・あるいは愛好家への販売を目的とする盗掘や採取などのために、絶滅の危機に瀕している種も数多くあり、全国的に大変大きな問題となっています。いかに野生のランが美しくても、それらはそっと観賞するにとどめ、そのままの姿を大切にしていきたいものです。遊歩道のカヤランもユウシュンランも大変小さく、カヤランに至っては樹木の高いところに生育していますから、見つけることさえ困難です。それでも、一度発見できたとしたら、次からはどこで出会ってもわかるようになります。「元気に育っていてくれてありがとう」、と感謝でいっぱいになり、声をかけたい気持ちになるのではないのでしょうか。

謝辞) この原稿を書くにあたり、宮城学院女子大学 生活環境科学研究所 ミツバチ科学研究部門の山口喜久二教授、渡邊誠教授、メリノール女子学院 (現四日市メリノール学院) 元国語科教諭 高木直美氏にご指導いただきました。紙面を借りてお礼申し上げます。



□彙報

2020（令和2）年度彙報

宮城学院資料室

資料の蒐集・受贈関係（2020年3月1日～2021年2月28日）

以下の資料受贈について感謝をもって報告いたします。（敬称略。冒頭の4桁数字は受贈・受領月日）

（1）定期刊行物関係

受領月日	刊行物名	発行元
0301	青淵 第852号 3月号	渋沢栄一記念財団
0310	琉球だより No.12	沖縄公文書館
0310	校史 Vol.30	國學院大學研究開発推進機構國學院大學
0310	ARCHIVES 沖縄県公文書館だより 第58号	沖縄県文化振興会公文書管理課
0319	國學院大學研究開発推進機構 機構ニュース	國學院大學
0326	福澤研究センター通信 第31号	慶應義塾福沢研究センター
0326	東北学院時報 第756号	学校法人東北学院
0331	東京大学 文書館ニュース vol.64	東京大学文書館
0331	東北大学史料館だより No.32	東北大学学術資源研究公開センター史料館
0403	キリスト教史学会報	キリスト教史学会
0408	青淵 第853号 4月号	渋沢栄一記念財団
0408	白金通信 No.503	明治学院大学
0419	明治学院歴史資料館資料集 第15集	明治学院歴史資料館
0510	青淵 第854号 5月号	渋沢栄一記念財団
0522	沼津市明治史料館通信 第141号	沼津市明治史料館
0603	青淵 第855号 6月号	渋沢栄一記念財団
0605	原阿佐緒記念館だより 51号	原阿佐緒記念館
0611	名古屋大学 大学文書資料室ニュース 第37号	名古屋大学大学文書資料室
0619	東北学院時報 第757号	学校法人 東北学院
0701	青淵 第856号 7月号	渋沢栄一記念財団

受領月日	刊行物名	発行元
0701	國學院大學研究開発推進機構 機構ニュース	國學院大学
0801	青淵 第857号 8月号	渋沢栄一記念財団
0801	ニュースレター 明治大学史 No.16	明治大学
0802	東北学院時報 第758号	学校法人 東北学院
0810	キリスト教史学会報 第177号	キリスト教史学会
0830	京都大学大学文書館だより 第38号	京都大学大学文書館
0904	青淵 第858号 9月号	渋沢栄一記念財団
1007	琉球だより No.13	沖縄公文書館
1007	青淵 第859号 10月号	渋沢栄一記念財団
1007	白金通信 No.504	明治学院
1007	大学時報 No.393-394	日本私立大学連盟
1007	東北学院時報 第759号	学校法人 東北学院
1007	東京大学文書館ニュース Vol.65	東京大学文書館
1102	東北大学史料館だより No.33	東北大学学術資源研究公開センター史料館
1102	慶應義塾福沢研究センター通信 第32号	慶應義塾福沢研究センター
1110	青淵 第860号 11月号	渋沢栄一記念財団
1127	東北学院時報 第760号	学校法人 東北学院
1210	青淵 第861号 12月号	渋沢栄一記念財団
1221	キリスト教史学会報 第178号	キリスト教史学会
1221	白金通信 No.505	明治学院
0105	青淵 第862号 1月号	渋沢栄一記念財団
0112	東北学院時報 第761号	学校法人 東北学院
0201	青淵 第863号 2月号	渋沢栄一記念財団

(2) 書籍関係 (紀要・年報・目録・図録を含む)

受領月日	刊行物名	発行元
0310	國學院大學 校史・学術資産研究 第12号	國學院大學研究開発機構 校史・学術資産研究センター
0319	GCAS Report Vol.9	学習院大学大学院人文科学研究科 アーカイブズ学専攻
0325	近代日本研究 第36巻	慶應義塾福沢研究センター
0325	東北学院史資料センター年報 Vol.5	東北学院史資料センター年報編集委員会

受領月日	刊行物名	発行元
0327	立教ディスプレイ Vol.5	立教学院展示館
0331	大東文化大学史研究紀要 第4号	大東文化大学百年史編纂委員会
0331	東北大学史料館研究報告 第15号	東北大学史料館
0331	東京大学文書館紀要 第38号	東京大学文書館
0408	沖縄県公文書館研究紀要 第22号	沖縄県公文書館
0408	キリスト教学 第61号	立教大学キリスト教学会
0413	専修大学史紀要 第12号	専修大学 大学史料課
0413	日本女子大学校規則	日本女子大学成瀬記念館
0420	山本覚馬建白「管見」	同志社女子大学史料センター
0521	武蔵学園史年報 第23号	武蔵学園記念室
0521	学院史料 Vol.33	神戸女学院史料室
0603	明治学院歴史資料館資料集 第16集	明治学院歴史資料館
0603	明治学院歴史資料館資料集 第11集	明治学院歴史資料館
0611	名古屋大学大学文書資料室紀要 第28号	名古屋大学大学文書資料室
0701	青山学院150年史編纂報告4 校友に聞く戦中・戦後	青山学院150年史編纂委員会
0801	大学史紀要 第26号	明治大学史資料センター
0801	杉村虎一宛 ポワソナード書簡集 村上一博編	明治大学史資料センター
0810	成瀬記念館2020	日本女子大学成瀬記念館
0830	追手門学院130年志	追手門学院大学 学院志研究室
0907	キリスト教史学 第74集	キリスト教史学会
1007	成城学園百年史紀要 第6号	成城学園百年史編纂委員会
1127	ヴォーリズらの教育事業100年小史	学校法人ヴォーリズ学園
1127	フェリスのあゆみ 年表と写真でたどる150年	学校法人フェリス女学院
1201	早稲田大学史紀要 第51巻	早稲田大学大学史資料センター
0125	斎藤報恩会と東北帝国大学	東北大学出版会
0222	聖路加看護教育の100年－知と感性と愛のアートー	立教学院展示館

(3) 受贈資料

受領月日	刊行物名	発行元
0408	村田洋子作品集	嶋田順好様
0410	黒柳徹子講演テープ、磯村栄一講演テープ	柳澤良彰様
0611	J・J・ランディス先生写真等	千葉智子様
0710	2019年度 宮城学院女子大学卒業アルバム	(株) 東陽写場 後藤浩策様
0711	創立100周年記念関連行事に関する資料等	太田富美子様

受領月日	刊行物名	発行元
0901	徽章、記念品等	伊勢文夫様
1113	はね駒 NHKテレビ・シナリオ	大河内真様

資料室運営委員会

委員長	嶋田順好	(宮城学院学院長)
委員	田中弘志	(宮城学院理事)
	長井祥子	(宮城学院同窓会会長)
	栗原健	(宮城学院女子大学准教授)
	丸山仁	(宮城学院中学校・高等学校教頭)
	伊藤幸子	(宮城学院中学校・高等学校事務室)
陪席	本田辰雄	(宮城学院事務局長)
資料室	佐藤亜紀	(宮城学院事務嘱託職員)

宮城学院資料室年報『信・望・愛』2020年度 第26号

2021(令和3)年3月31日発行

編集 宮城学院資料室運営委員会/宮城学院資料室

発行 学校法人宮城学院

〒981-8557

宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1

電話 022-279-1311(代表)

022-279-7765(資料室直通)

E-mail shiryoshitsu@mgu.ac.jp

印刷 株式会社 東誠社

〒983-0004 仙台市宮城野区岡田西町1-55

電話 022-287-3351
